

---

# WILD CAT

館波実笠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

WILD CAT

### 【Zコード】

N7749A

### 【作者名】

館波実笠

### 【あらすじ】

魔魂と呼ばれる強い魔力を宿した魂を持つ人間 悪魔と、彼を守る墮天使の物語。折笠翼を狙う

## プロローグ「黒い空・白い月」・1（前書き）

墮天使とか悪魔とか精霊が出てくるファンタジー小説です。おもしろそうだなつと思つた方はどうぞ一読ください。

## プロローグ「黒い空・白い月」・1

プロローグ「黒い空・白い月」

おかしな夜だった。

その日は先ほどまで顔を見せていた月がいつの間にか空から姿を消し、星もほとんど見えなかつた。

漆黒、闇と言うのがこれほどふさわしい夜も珍しい。

風も吹かず、あたりは静まり返り、生き物の気配すら感じられない。

「ふう……」

黒い背景に白い煙草の煙が引かれた。

誰もいなかつた空間には今、白髪の男が立つていた。白髪と言うよりかは銀髪に近い。それに歳をとっているわけではないだろう。顔立ちから二十代前半ぐらいだということがわかる。白のロングコートを着ている。

彼の横には白のベンツが停められている。白い塗装は暗い夜の風景にぼんやりと浮かび上がつていた。

「白河隊長、配置準備完了しました」

どこからか現われた小柄な男が煙草を吸つている白河と呼ばれた男に告げる。

「わかった。指示があるまでその場で待機」

小柄な男は返事を聞くと暗闇に姿を消した。姿を消した方向にはこれまでいつの間にか五台の白塗りの車が停車していた。

白河大輔は煙草を足元に落とし、踏み消した。

「……さて、そろそろですね」

縁なしの眼鏡を人差し指で押し上げる。

白河の視線の先には赤い光が見える。それもいくつも。おそらく

パトカーの回転灯だらう。サイレン音も聞こえてきた。

パトカーが追いかけているもの。それは人だつた。

ヘッドライトに照らし出された人は超人的なスピードで走つてい  
た。

よくみると人ではない。長い髪、一本ずつの手足は人のものだが、ちょうどどこめかみのあたりに左右に一つずつ後ろに長い突起が見えた。それに正確には走ってはいない。高速で飛んでいるのだ。

土手にあるジョギングコースで人影は立ち止まつた。

白河を睨みつけている。猫のように瞳が縦に伸び、金色に輝いている。

「……まあですね。あなたの話は我々もよく耳にしますよ。……拘束状が出ています。おとなしく捕まつてもらえますかね？」

1

人影は無言のまま白河を見下すように立っている。

あつてもいいことがありますけれど

言葉が終わると同時に車の影から武装した白い集団が現われた。白い戦闘用のような服に身を包み、暗視用ゴーグルと構えたサブマシンガンだけが黒光りしている。

「……お前たちの目的はなんだ?」

人影が唐突にも声を発した。透き通るような声で人影は女だと思  
れる。

「あなた方、悪魔と同じでしうね」

悪魔と呼ばれた女は腕を組むと威圧的な態度で言葉を続けた。

## 「魔魂か？」

「さあ。私たちは上の命令に従うだけですから」

「ふん。相変わらず、お前は……」

女は髪をかき上げるような仕草をした。

「やめてくださいよ。私はあなたの知っている私とは違うんですか  
いら

「そうだったな。……そろそろそこをどいてもいえると楽なのだが  
？」

「そういうわけにもいきませんね。これでも一応仕事なんで……。  
一連の魔的殺人の容疑で拘束する……」

白河の眼鏡のレンズがヘッドライトに反射して光った。口元が不  
適に笑っている。

「……撃て」

感情の一切こもっていない口調でつぶやいた。

それに呼応して集団のサブマシンガンから鉛弾が射出される。  
弾は一直線に女を目指し、その体を引き裂いた。

いや、そのように見えただけだ。銃弾は虚空をどこまでも、何に  
も当たらずに跳んでいった。射線にあつた街灯が弾ける。

「普通の弾では私を倒すのは無理だ……」

集団の背後から女の声がした。白い車体の上に腕組をして仁王立  
ちしている。車の横にはマシンガンを構えていた白服の集団が倒れ  
ている。

白河は倒れた集団を一瞥するとため息を漏らした。

「ふう……。まったくかえない部下で困りますよ。では、私たち  
が参りまじょうかね、シリフィード……」

そう言つと同時に強い風が白河の銀髪を撫でた。

「……御意」

白河の真横に白い天使を思わせる人影が、片膝をついた格好で現  
われた。白河のロングコートと似たタイプのコートを着ている。髪  
が長く、白い。顔立ち、声ともに中性で男とも女とも取れる。

「倒せますか？」

「仰せのままに……」

シルフィードと呼ばれた者は顔を上げた。空色の目が女を捉える。

17

シルフィードが人外の言葉を発した。魔術呪文だ。

右腕を突き出すと腕の周りを奇怪な絵文字かぐるぐると回転し、徐々に銃の形を作り出した。

女はそれを視認すると超人的な脚力を思わせる高さまで跳躍した。距離は地上から十四、五メートルぐらいだろうか。乗っていた車の天井がへこんだ　　といふか破碎した。

1

中

女を懲訓する口せりが

両手はシリツヘリトが発生したのと同時に、両手が浮かびあちらも銃を形成する。

引き金が実体化し、指に力を込める。

まるでジエット機が通り過ぎたかのような爆音とともに、弾丸は放たれた。

シルバーには超速を超えた弾丸に臆する」となく、銃の弓を金を引く。すさまじい反動。

弾丸は互いに相手を目指していたが、シルフィードの弾丸は途中で軌道を変えた。

バキイイン！

金属の擦れ合う音。弾丸同士が衝突したのだ。同時に衝突した地点から爆風が押し寄せる。

白河は田を細めると、爆風を堪えた。シルフィードも腕を顔の前にかざし爆風をしのぐ。銃は構えたままだ。

100

風が収まるとな空には何もなく、辺りは夜の静けさを取り戻していた。

「バスンという何かが破裂するような音がした。」

白河は不審そうな顔になると車の横にしゃがみ込み、何やら確認する。

「ふ、相変わらず手抜きがない。……失敗ですか」

車のタイヤが見事にパンクしていた。

「申し訳ありません」

シルフィード頭を垂れた。長い銀髪が風になびく。

「いえ、まだチャンスはあります。それに彼女の目的もわかりましたしね」

「コードのポケットから煙草を出し、火をつけた。

と、ライターの火が破壊された車の天井に広がる一センチほどの赤い点が浮かび上がらせた。白河は指で擦り取るとそれを口に運ぶ。鉄のような味がした。

「……魔魂ですか。厄介なことになりますね……」

ペロリと唇を舐める。

煙草の煙は冷えた夜風に乗り、闇に霧散した。空にはいつの間にか月が出ていた。

満月の、きれいな月の夜だった。

## プロローグ「黒い空・白い月」・2

魔術。それは人間が古代から使う儀式などを指す。魔と人間との関わりは、犬と人間との関係ほど昔から続いているとも言える。

ある地域に伝えられている昔話を少ししたいと思う。

いつの時代か、悪魔と呼ばれるものが天界から地上に追い出されました。もともとは天使だつたらしく背中には翼が生えていました。その翼も地上に墮ちたせいで真っ黒に染まってしまいました。

それは、始めは一つでしたが、地上で徐々に仲間を増やしていました。仲間といつても生き物ではありません。森の精霊や海の化身など、多くを仲間にしました。

そして、最初に天界から追放された天使をルシファーと呼ぶようになりました。

ルシファーは地上で増やした精霊の仲間とともに生き物を仲間にし、世界を手に入れようと考え始めました。

数年後、最もつけいりやすい人間にルシファーは近づきました。案の定、人間は簡単にルシファーたちに操られてしまいました。

ルシファーが地上に追放されてから百年ほどたったころ。ルシファーは人間界を支配するほどの力を持っていました。そんなルシファーに、ついに天界からルシファーを滅するための部隊が派遣されました。

隊長はシルフィードと呼ばれる風を操る精霊でした。

ルシファーもそれに負けじと精霊の仲間で編隊した部隊をぶつけました。

まさしく魔力のぶつかり合い。世界はこの戦いをただ見守るしかありませんでした。

戦いは長引き、三年の月日が流れました。

両部隊とも消耗する一方で、量に勝る天界側の部隊が徐々に、徐々にルシファーを追い詰めていきました。

そして状況はルシファーにとつて最悪な方向に向かってしまったのです。

精靈たちの裏切りです。圧倒的に不利だと悟った精靈たちは一斉にルシファーを襲撃したのです。予想外の出来事にルシファーは何もすることができずに捕まってしまったのです。

ルシファーは翌日、処刑をされました。

それ以来人間は悪魔を恐れ、関わらないようにしました。いえ、正しくはシルフィードたちにそうさせられたのです。今回の事件をきっかけに天界がこのよつなことが一度と起きないようにさせるためです。

世界には平穏な世の中が戻ってきたのです。

話はここまでたしめでたし、ではない。

処刑が行われたとされる年から数百年が過ぎ、悪魔という言葉ですら忘れられていたころ……。

地上は革命が次々と起り、国家間での争いが激化しつつあった。何人もの権力者は力を競い合い、より上を目指した。権力者の傍らには必ず魔術を使う者がいた。魔術者であるが、魔術 자체を教えたのはたった一人の悪魔である。

その悪魔は自らをルシファーの末裔だと名乗った。

しかし、人々の多くはルシファーの伝承を知らず、その悪魔を悪魔と認識をしてすらいなかつた。

結果として悪魔は再び反映を見せる。

だが、悪魔とて永遠に生きられるわけではない。人間の十倍以上とはいえ寿命はある。

その寿命を延ばすことができる人間を、人間の魂を魔魂と呼んだ。悪魔は人間と契約をし、その魂を糧として魔力を使う場合が多い。

また、その魂を吸い取ることによつて寿命を延ばすのだが、普通の魂では延ばせて二、三年がいいところなのである。

つまり、魔魂というのは文字通り魔力で形成された魂なのだ。これは人間としては例外的でそう簡単に持つていてるものではない。より長く、より多く生きて富と名声を浴びたいものは悪魔と契約をし、その悪魔も魂を吸い生き長らえる。そういうサイクルが続いた。

いつしかルシファーの末裔だと名乗つていた者が消え、世界から悪魔を表立つて名乗る者は消えた。

そして平穏が訪れる。

これはあくまで人間からの見方であり、本当に平穏かどうかはわからない。

現代になり、魔力というものは表の世界には現われなくなつたが、裏では確實に力を増していた。

## 第一章「紅い眼・黒い瞳」・1（前書き）

折笠翼と天城真咲……二人が出会ったとき、その運命は大きく変わる…

悪魔の女と白河が対峙したときから一ヶ月の月日が経っていた。  
春も終わりに近づき、多少湿り気を帯びた風が吹く。

木々も青々とした葉を出している。幅の広い歩道に今はアーケード状に伸びた木の枝が影を作っている。

歩道を歩くのは学生が大半である。男子はYシャツにタイ、灰色のズボン。女子はブラウスに赤のプリーツスカート。学富学園高等学部。それが、彼らが通う学校である。

「あー……朝はだめだ。俺」

折笠翼はそうぼやいた。切れ長の目が今は半分程度の大きさに開かれて、眠さを強調している。彼の特徴でもある脱色した金色に近い髪もいつもよりハネていない。

彼は周りにいる学生と同じ制服を着ている。学校があればどこでも見られるような登校の風景の中にある一コマだ。

「はは、しかもこの天気。最悪だな」

翼の隣にいた新明和貴も苦笑いを浮かべるだけだ。

晴天というのが最適な天候。まさしく雲一つなく、嫌味なほどに太陽はかんかん照りだ。

「……暑いい」

「大丈夫だ。校舎はもうそこにある」

新明が指を指した先には学校があった。

学校の校舎といえば白塗りの壁、そつけない窓といったイメージがありそうなものだが、学富学園の校舎はどれもモダンな雰囲気がする全体的に赤茶色をした建物だ。どこか異国の風情を思わせる。

学校自体は創立二十年とわりとこの辺では新しい部類に入る高校だ。偏差値もそこそこで、大学進学率もほどほどにある。そしてこの学校の最大の特徴は市内一区画まる」と学園となつていて、さ

ながら学園都市といったところだ。先ほどの歩道も学園の敷地内にあるものである。また、学部が初等部から高等部まであり、希望者は所属の大学にも進学できる。ちなみに彼らの通う高等部は学園でも最深部に位置する。

やけに大きい高等部の正門を抜けると下足ロッカーに向かう。

「そういえば、今日、梓は一緒じゃないのか？」

「ああ、先に行ってるみたいだ。生徒会の用事があるみたいで」

「ふうん」

翼が返事をすると、後ろから声をかけられた。

「何？ あたしの話してたの？」

声の主は翼たちと同じクラスの倉本梓くらもと・あずさだ。童顔で大きな目。栗色の髪をボブカットにしている。クラスの中で異性同性を問わず人気のある少女だ。翼と新明の幼なじみであり、新明の彼女もある。

「ん？ 梓か。まあそんなところだ」

翼はそつけなく答えながら上履きに履き替える。

「なによー、翼。はつきりしない」

梓は頬を膨らませ、翼を小突いた。その間にも翼は先に進む。

「それで？ 用事つてのは何だったんだ？」

新明が梓に並びながら訊く。

「ああ、今日転校生が来るのよ。それでクラスをビニにするかなつてやつ」

「そんなので呼び出しか？」

「そう言わればそうねえ。何があるのかな」

梓はあまり気にしていないような口調で言った。

「ま、いいか。で、その転校生つてのは何組に来るんだ？」

新明の方は興味津々で話に食いつく。

「うちのクラスだよ」

翼の席は教室の窓際、一番後ろ。覚えやすい場所だ。

教室内ではどこから広まつたか、転校生の話題で持ちきりだった。

翼は集まつて話すクラスメートの間を抜けるよにして席に着いた。

カバンを机の横にかける。

「……隣は梓だったか？」

何気なく顔を上げると、同じようにカバンをかけている梓と田が合つた。

「あれ？ 翼？」

梓もきょとんとした顔でいる。

昨日まで梓の席は翼の斜め右後ろにあつた。それが隣同士ということは、

「なるほど。その転校生の席は俺の前か」

翼が改めて席を数えると一つ増えている。気が早いことだ。

「あ。そうだよ。確かに名前は」

梓が言葉を続けようとしたとき教室の扉が開けられた。立てつけが悪いのかこのクラスの扉だけがらがらと音が出る。生徒たちがあわてて自分の席に戻る。

「じゃ、号令」

翼たちの担任の荒崎が入つて來た。

「起立」

日直が号令をかける。

「礼 着席」

がたがたと音を立てて席に着く。

「あ、もう知つていてると思うが、このクラスに転校生が来るざわざわとしたどよめきのよつなものが改めて起こる。

「天城真咲さんだ。じゃ、入つて来ていよ」

荒崎が声をかけると開けっぱなしだった扉の外から一人の少女が入つて來た。はじめから一緒に入つて来ればいいのだが、おそらく演出好きの荒崎がそうさせたのだろう。

腰まで届くほど長い黒髪。整つた顔立ちで肌は白い。切れ長の目が少しきつそうな感じを出しているが近寄りがたいほどではない。

全体的に見ても美少女の部類に入るだろう。

真咲は荒崎の横に立つと、クラス内を見回した。ざわめきが増す。

「天城真咲です。今日からよろしくお願ひします」

ペコリと頭を下げる。

きれいな声だな、と翼は思った。

「え、それじゃ、天城さんはそこの席に」

荒崎が窓際の列の最前を指差す。

「はい」

真咲は頷くと席に向かった。席に着こうとしたとき翼と視線が合つた。

「へ？」

一瞬、彼女が翼に笑いかけた。しかし、本当に一瞬で誰も気づかない。

「あ、一つ忠告しておくが、天城さんを質問攻めにして困らすんじゃないぞ。それと部活の不法勧誘もだ。いいな？」

荒崎が釘を刺すように言つ。

「わかつてます！」

新明が妙に気合の入った口調で言つた。

「特にお前に気をつけて欲しいんだがな。まあ、それだけわかりやいいだろ」

「はい、大丈夫であります！」

新明はさらに気合を入れて答えた。

「はは、よく言つぜ」

「そ、だね」

翼と梓は呆れたような表情でつぶやいた。

新明はクラスでもお調子者で通つていて、彼が気合を入れたときにはいい方にことが転ぶことがない。少なくとも翼が見た限りでは、「どうせあいつが一番に質問攻めにするんだろうな」

「まったく、浮気性なんだから」

梓は頬を膨らまして言った。

翼は苦笑すると、席の前の方にいる真咲の後姿を見た。今は新明の方を見て微笑している。

「けつこうかわいいかも」

「え？ 何か言つた？」

「いや、何でもない」

翼は頬杖をつくと窓から外を眺めた。

朝のHRが終わり、一時間目の授業が開始するまで真咲は案の定質問攻めにあつていた。リーダーはもちろん新明。真咲を中心に集まっているのは男女問わず、ほぼクラスの全員。

遠巻きに眺めていた翼もいつの間にか集団に連れてこられていた。「それで、何部に入るつもり? 出来れば陸上部に」

「おいおい、バスケ部だろ?」

「何いつてんだ。ここは我が弓道部に」

王道通りの質問だ。そこへ翼を連れて来た新明が割って入る。

「待て待て、真咲ちゃんが困っているだろ? 質問は一人一つまでだ」

いきなり入つて来た新明に「ちゃん」づけで呼ばれた真咲は困つたような笑顔を浮かべている。当然だつて、翼は心の中でつっこんだ。

「何でお前が仕切るんだ」

翼が冷静にこちらは声に出してつっこむ。

「そうだ。何でだ」

「いつもお前はそつやつて」

「それに慣れ慣れしいぞ」

質問攻めをしていた生徒たちも一斉に新明を非難する。

普段なら新明の提案に従うのだが、今回は別のようにだつた。美少女転校生の前だからなのだろうか。

「な、何を言つてるんだ」

「さては天城さんと梓ちゃんで一戻かけようとしてるな?」「ば、ばかな!」

あわてふためく新明。

「怪しいな」

「手前H… 鰐沢だぞ。せめておすそわけ……じゃない、そういうことはやめる」

「やうだ…」

あつとこゝ間に男子の非難の的になつた。

「おいおい、翼なんとかしてくれよ」

「やだ。それに梓も怒つているぞ」

翼が指差した先には一時間田の教科のノートを長く丸めた梓が仁王立ちしている。

「和貴いいいいいいいいい」

普段のかわいげのある表情からは想像できないかのよつた怒りようだ。

「ふむ。後ろにオーラが見えないこともないな。これはなかなか…」

慣れた口調で翼が言つ。

「な、なんとかしてくれ、翼。ホントに」

「無理だ。前に止めようとして死ぬ思いをしたからな。これも宿命だと思って、殺られて来い」とんつと新明の背中を押す。

「あつ…」

新明と梓の距離、わずか五センチ。

「フォン…！」

空気を切るよつた音がした。

「ゴツッ！」

鈍い、木材同士、聞こえ方によつては金属がぶつかるよつた音。

「 げばらッ！」

新明の悲鳴。とこゝよつかは衝撃によつて意識せずに吐き出された息だらつ。

「ずざあああああ。

床と新明の擦れる音。これほどにもかとこゝの大きさだつた。

「今だ！」

新明反対派の生徒のかけ声。団結力は普段の何倍に高まっていることだろうか。

「うわっ」

新明逃走。

「待ちなさい！」

梓追走。手には丸められたノート。スタートダッシュは完璧。音速を超えた？

「まつたく。何やつてんだか」

翼は呆れて額を押さえた。そこで真咲の視線が向いていることに気づく。質問攻めをしていた生徒たちも全員新明狩りに行つたため教室には一人だけだ。

「ああ、ごめん。自己紹介が遅れた。折笠翼です。部活は……特に入っていない。えへ、とりあえず、ようじく

翼は何気なく手を差し出した。

真咲はにっこりと微笑むと、

「いらっしゃい、ようしくね。……翼」

真咲の手が翼の手を取った瞬間、翼は自分の頭の中を電流が走つたような衝撃に襲われた。手のひんやりとした感覚だけが鮮明に真咲の手を握っていることを知らせる。手を離そうとしても真咲の掴んだ手は離れない。

「なつ……」

急激に意識が遠のいていくを感じた。

「天……城、お前……」

翼は視界が暗転していくのがはっきりとわかつた。

一時間目が始業のベルが鳴る。

追われつづけていた新明も安堵したかのように席につく。

「まったく、何で俺ばかり」

振り返れば殺意のこもったような視線が降り注がれているが、それを無視してさらに後方へ視線を向けた。

「翼のやつ、どこ行つた?」

視線の先には窓際最後尾の席。翼の席に座る者はいない。その前の真咲の席にもだ。

「あいつら一人の方が怪しいじゃねえか」

新明は愚痴を溢すと、前に向き直つた。

梓も翼の席を見て、不安そうな顔をしている。

「翼、どこいったのよ」

重たく閉じる瞼を開けると蛍光灯の光が目にまぶしく入つた。消毒液のような臭いが鼻をつく。

「ん……ここは」

「保健室よ」

聞き覚えのある声がした。真咲の声だ。

「天城? お前、何をした!」

翼は勢いよく飛び起きた。真咲は翼が寝ているベッドの横の椅子に座つていた。

「何も、と言えば嘘になけど、大したことじやない。少しの間眠つていてもらつただけ」

少しというのは正確ではないかもしない。ベッドのすぐそばにある窓からは高く昇つた太陽が見える。おそらく時間では一時ぐらいだろう。そうなると翼は朝から五時間も眠つていたことになる。

「何だつて？ それにお前……」

翼は真咲の口調がどこか威圧的な感じがあると思った。

「私がどうかしたの？」

「……何者なんだ？」

その質問を待っていたように真咲は不敵な笑みを浮かべた。

「 悪魔よ 」

それは唐突で、突然で、いきなりだった。

「な、何を言つて……」

ほどんどう反射的に言葉が出た。当たり前の反応だろう。飛び上がらなかつたのが不思議なくらいだ。心臓は緊張のため高鳴つてゐる。

「何つて、言つたまんま。私は悪魔」

「そんなバ力なことがあるかよ。つーか、信じるか？ フツー」

真咲は意地悪げに声を上げて笑つた。

「ははは。やつぱりあなたはおもしろいわ」

そして視線を真つ直ぐに翼へ向ける。

「信じるか、信じないかはあなたの勝手だしね」

「それは……どういふことだ。何が目的なんだ？」

翼の言葉に真咲は一瞬逡巡したが、すぐに口を開いた。

「あなたに協力してもらいたいの……。あるものが必要だから」「なぜ？ 悪魔が（彼女の言つていることが本当だとしたらだが）なぜ普通の人間の俺に？ 完全に混乱した。

「何でだ？ どうして俺なんだよ」

「あなたは、自分では自覚していないでしようけど魔力があるのよ。空想小説とかで魔力とかのことは知つてゐるでしょ？ あれとほとんど一緒に。それがあるからあなたに協力してもらいたいの。もし、断るなら……」

真咲の目が冷酷な光を帯びた。翼はその視線を真つ直ぐに受ける。今の真咲の目は人を難なく殺せるような目だ。気を失つ前までの日

常が走馬灯のように浮かぶ。

（ああ、これって例のアレだな。死ぬ前のアレ……）

翼はどうしようもなく思いつづも、声を発した。

「そ、それは困るな」

真咲は拒絶するのを待っていたかのように言葉を続ける。

「ふふふ、まだ何も言ってないのにね。ま、でもご想像には反すると思つわ。『命』とかじゃなくて、あなたの『右腕』をもらいたいと思つてるの」

「は……？」

翼は絶句した。わけがわからない。今、彼女が何を言つているのかわけがわからない。右腕？　は？　何を言つてるんですか？

「右腕ならあるじゃないか。それとも予備が欲しいのか？」

やつとのことでそう言つた。すると真咲の顔がぐつと近づいた。

瞳は赤く輝き、猫のように縦長に伸びた。

「この腕、私のじゃないの。何年も前から。だから本当の腕を返して欲しいの。じゃないと力が發揮できないのよ」

「ホントにわけがわからねえよ。お前の言つてることが……」

「そう。協力は願い下げつてこと?」

「ああ、第一、俺はお前と知り合つてもいない。ただ同じクラスなだけだ。それに悪魔なんて……」

「わかったわ。それじゃ、『右腕』もらうわね。あなたの協力なしじゃあいつは倒せない。なら私が力を取り戻すまでよ」

翼は背筋に悪寒が走ったように感じた。本当の恐怖とでもいうのだろうか。口を開いても重圧で何も話せない。

「

一気に室温が下がった気がした。もし魔力を視認できる者がいたとしたら真咲を取り巻く魔力の光に驚くことだらう。

「うッ！」

翼は自分の右腕がちぎれんばかりの力で引っ張られるのがわかつた。

そして真咲の顔がさらに迫る。吐息が耳にかかる位置まで来た。

「でもね……もし私が力を戻したら、この世界滅びちゃうよ？」

「冗談めかした言い方だつたが、脅しとも、願いとも取れる言葉。

「脅しか？」

聞こえるのは真咲の不適に笑うような声。わかるのは腕の痛み。

奥歯を噛み締めて痛みを堪えるが、徐々に腕の感覚が薄れて行く。

「さあて、どうする？ 翼。腕、渡す？」

意地悪そうな声が耳元でする。

とても長い沈黙。

「…………」

「わ？」

「わかった。協力する」

翼は痛みで歪む顔を真咲に向けた。そこには相変わらず不適に笑う顔があつた。

「それじゃ、契約

再び真咲の顔が近づく。今度は真っ直ぐに。

「え？」

二人の距離が零になる。

「…………」

零になっていたのは数秒か、数分か。

ようやくと思えるほどの時間に翼は感じた。真咲の顔がようやくはつきりと見える距離まで離れる。

「何を……」

「ふふ、契約よ、契約。今ので成立」

真咲は人差し指で自らの唇を押さえた。妙に大人びた表情に見える。

「協力してもらうからには、それなりの、ね？」

「ね？」と言われても困る。

「…………ふう。それで、俺は何をすればいい？」

一つため息をついて、ベッドから足だけ投げ出すようにして座り

る。

直す。

「へえ、けつこう飲み込みがいいわね」

「あいにくこの手の小説はよく読んでね」

「また声を上げて真咲が笑つた。

血漫ではないが事実だ。笑われる筋合いはない。

「ははは、やつぱり翼は面白いよ。前からなの?」

「さあな。そこまで面白いって言われたのは初めてじゃあない」

「やうやうやうやう……。じゃあ、私のことから話そうかしらね」

「ずうううううん!」

表現通りの重低音。映画館でもここまで出ないだろ。真咲の舌打ちが静まり返つていた部屋に響く。

「何だ?」

翼はまたも困惑した表情で音のした方　正門の方に向けられる。この保健室ではちょうど窓のある方向だ。

「警察よ。しかも対魔除用のね」

「おいおい、そんなのが何で」

「私が追われてるからよッ!」

手近にあつた窓を開ける……とこうかほんびぶち破ると真咲は外に飛び出した。

(今度こり、どうこうことだ?)

と思いつつ、翼はあわててベッドを下りると窓から真咲が落ちたと思われる地点を見た。そこにはしつかりと真咲が立つていた。無傷のところを見ると本当に魔に類する存在なのだろう。翼は一応胸を撫で下りした。

「これは、どうも、まことに巻き込まれたな。まあ、齧られたよつなもんか。まあ、待つてもヒマだし」

翼がいる保健室は校舎の五階。正門の方に窓があり、真咲はそこから飛び降りていた。

「……思つていたよりも早い」登場ですね

真咲の姿をまっさきに視認できたのは白河だった。煙草の煙はゆっくりと立ち上っていた。彼の後ろには一ヶ月前と同じ、白い車が停めてある。やうに後ろには同じよう純白の車体。

「シルフィード……」

「……ここに」

今までだれもいなかつた白河の横に白い影が音もたてずに現われた。

「今回こそ仕留めてください」

「……御意」

シルフィードは静かに頷くと、

「

呪文式が口から漏れ、シルフィードの両腕に幾何学的な模様が取り巻く。それは徐々に形を形成し、白銀の自動拳銃が顕現する。トリガーにかかつた指に力が込められる。

射線上には体育の授業があるクラスが整列をしていた。突然現われた白い車団を不審に思い、くども視線を投げている。だが、シルフィードの手に顕現したものが銃だとわかるとクモの子でも散らすように逃げまわった。

生徒たちがいなくなつた先には黒髪をなびかせている真咲がいた。それはどこか美しく、戦乙女を連想させる。

「お前……人間を巻き込むつもりか……」

真咲はシルフィードを威圧するような口調で言い放つ。怒りがこもつてゐるようだった。

「あなたを倒すのならば……」

決意の固まつたとでもいうよつた台詞だ。一いち方に感情は一切こもつていな。

「そう。それなら

真咲の腕にも幾何学的な模様が取り巻く。形成されたものは漆黒の自動拳銃。

「いくわよ

「来い

二つの光が交錯した。

二つの人外の存在を梓たちはクラスの窓から確認することができた。

「ち、ちょっとなによ。あれ」

梓が外を覗き込むようにして見ている。

突然の銃声に授業は中断されて、生徒も教師も窓の外を見入っている。どのクラスでも同じようだ。

「と、言つ前に翼はまだいなか

「それより、あれ何よ！ 天城さんじやないの？」

新明の能天気な発言に梓は叫ぶように言つた。新明も窓の外に視線を走らせ……驚愕に目を見開かせた。

「…………翼？」

新明の視線の先 校舎の壁際、端の方に翼が立つっていた。

「ちょ、翼！ 一時間目からいないと思つたら、あんなところに」

「そういうや、真咲ちゃんが保健室に運んでたつて聞いたけどな」

「それなら……」

なぜ、二人は外にいるのか。なぜ？ なぜ？

白い光跡、黒い軌跡がぶつかり合つ。弾かれ、弾き合い。引かれ合い、離れる。

激突。

爆発。

閃光。

そのたびに砂塵が舞い、校舎の窓ガラスがびりびりと音をたてて震える。

「疾ツツツツツツツツ！」

「破アアアアアアアア！」

いつの間にか一人の手には銃ではなく、真咲は片刃の剣、シルフィードは両刃の剣が顕現していた。

シルフィードの洋刀が打ち下ろされる。真咲は刃で受け流すと、柄を突き出した。それを見事な体捌きで避けると左手にもう一本顕現させた。

真咲は一瞬驚いた表情になつたが、彼女も同じよつに片刃の剣を出現させた。

互いに新たに出した剣を撃ち合わせる。

反動で二人は爆発的な勢いで離れた。片手、片膝をつき着地。まったく同じ、鏡に写したようなモーション。

着地点は土のグラウンドのため爆煙が立ち込めた。しかしそれも一瞬。煙は一瞬にして晴れた。中から拡散させられたのだ。

わずかひとつ飛びで二人の距離は狭まる。刃と刃の距離が零になつた。三度剣を交える。さらに一一度三度打ち合つとまたも反動で離れた。

「さすがね。伊達に『ヴァイス・エンジエル』やつてないわね」

「あなたがその名を口にしないでください……」

「ふふ、汚れるつて？ 私が倒せたらそう言つうのね」

真咲は翼にしたように不適に笑つた。ただ態度が高圧的だ。そのまま両手の剣を軽々とシルフィードに投げつけた。シルフィードは簡単に受け流す。続いて放たれた銃弾を洋刀で切り落とす。半分になつた銃弾はシルフィードの前に五セツト落ちた。

「こんなもので、私を倒せるとお思いで？」

「いや……」

つぶやくような言葉が終わる前に、真咲はシルフィードの眼前にまで迫っていた。真咲はシルフィードの驚愕の表情がはつきりとかつた。

彼女の顔は不適に歪む。

「……全然」

火花。

閃光。

雷光。

連撃。

それを生み出す刃をシルフィードは見事に受け止める。さらに切り返す。

「やはり、不完全なあなたでは相手にもなりません」

さらに瞼が閉じられる。形成は完全にシルフィードに有利になっていた。真咲の表情が苦渋に歪む。今まで小手調べだつたのだ。

「右腕……」

一瞬の隙をついて、シルフィードの手に握られている刃が真咲の右腕、ひじの辺りに吸い込まれる。

「ああああ　！」

ひじを押さえながら真咲は無防備にも崩れ落ちる。

「まったく、どうしました？　刃で斬つてはいませんよ？」

確かにひじを打つたのは峰。しかしひじからは鮮血が滴る。音がするのではないかというほどに歯を噛み合わせている。

「お前……」

「どうしました？　我々の目的はあなただけではありますよ……」

そう言つシルフィードの左手に白銀の自動拳銃が顯れる。

銃口の先は　翼。

そうまでも無表情、無感情の声がなぜか凜とした響きを帯びた涼やかなものだ。

引き金にかけられた指に力が入るのが端から見てもわかつた。その様子はスローモーションのように見える。

だが、自分の思考はいつもと同じ速度で回転する。せりひ思考よりも先に体が動いた。

舌打ち。

背中に人外の羽が生える。軽く地面を蹴るだけで体は綿のように軽く、目的地に跳ぶ。

ダウウウン！

銃声が遅れて届いてきた。もちろん音速と同等の速度で飛ぶ弾丸に追いつかれてしまつ。

声を出す時間も惜しく、漆黒の巨大な翼をさらに大きく広げた。鋼鉄の術式が刻まれた弾丸は悪魔の羽に弾かれた。

「翼あつ！ こっちに！」

無傷の左手を翼に伸ばす。

翼は状況が飲み込めないままその手を掴む。

羽ばたく、羽ばたく。

広げれば優に一メートルは越えるであろう翼を羽ばたかせる。一人分の重さがあるにも関わらず、すぐに浮かび上がった。

「……逃がしません」

シルフィードはしつこくも飛び上がった一人に銃口を向けた。

「しつこいッ！」

真咲は殺意のこもった目で睨みつけ、顕現させた自動拳銃を撃ち返す。銃口からは異常なほどな光が溢れた。

閃光の中に聞いた最後の音はシルフィードの舌打ちと、白河のため息だった。

校舎内にも光は届いた。

「今度はよお

「お？ 翼のやつどうなつた？」

生徒のほとんどが窓から身を乗り出すようにしていた。授業は実

質中断。終業のベルがなる始末。

光が引く。そこには何もなかった。白い車団が現われる前と同じ風景が広がっていた。白河たちもシルフィードも真咲も、翼ですらいなくなっていた。

「ちょっと、翼はどこ行つたの？」

「わからない。でも、何だつたんだ。今の「彼らにその理由はわからない。それを知るのはもう少し後のこと。今はただ外を見ているぐらいしかできない。

第一章「紅い眼・黒い瞳」・5（前書き）

第一章の最終話です。

「ふう。これで一段落ついたかな」

真咲は辺りを確認するように見回すと、翼に向き直った。長い髪が流れる。

一人は真咲の飛行能力を使って都内のビルの屋上にいた。雑居ビルらしく外壁にはいくつもの看板が取りつけられている。他にも同じようなビルが近くにある。

さすがにシルフィードたちもここまで追いつくとは諦めたらしく、追撃の気配はまったくない。

「訊きたいことが多すぎるって顔してるとわね」

「ああ、まだ何を協力すればいいのか聞いてないからな」

翼の問いに真咲は一呼吸入れて答えた。

「私の敵を倒してもらいたいの」

「敵？」

「ええ、こないだまではさつきの対魔用の警察に捕まつてたんだけど……一週間前にこの辺りに出たの」

翼は今日はじめて納得したかのような顔になつた。

つまりは悪魔の脱走犯を捕まえろということだらう。

「なるほど。でも、それはその対魔の警察がやる」とじじや……

「いや、そのはずなんだけど」

急に真咲の顔が曇る。

「何かの手違いで私が狙われるよう指示されているらしい。それで私はそいつを倒さなきやいけないのよ」

「ふう……難儀だな。だいたいどんなやつなんだよ」

翼が近くにあつた階段に腰をかけた。屋上に出るための扉の下に設置されたものだ。真咲もそれに倣う。そして改めてゆっくりと話し始めた。

「……私が三百年前に倒したやつよ。『化け物』それが一番しつくりくる言葉ね」

「ん？」一瞬、驚愕すべき単語が。ツツコハを入れるべきか？

「えつと、まあ、三百年？」

一応、説明を求めた。

真咲は怪訝そうな顔をした。

「なによ？ 翼、私が本当に十六、七の高校生に見えてたの？」

「はい」

即答。見えていた。むしろそれ以外にどういつ風に見ると。

「まあ、仕方ないけど。私、一応、五一六歳よ。しかもこれでも若い方なんだから」

「どういう中途半端な数字だ。ま、悪魔っていうぐらいだしな。SFか？ ホント」

「そう思つても仕方ないわ。長くなるけど、昔話聞く？」

翼は無言で頷いた。一番訊きたかったことだ。

「さて、何から話そうかしらね」

田をつむり、思い出すよつて言葉を紡ぐ。

「まず、私のことから。悪魔についての説明は……そうね、『神から見捨てられし者』『天に相反する者』『闇に住まつ者』いろいろ言い方はあるけど、あなたの前にいるのが本物。そして私は堕天使の末裔。だから正確には『元』天使とも言えるわね。そして私は生まれて五十年後にある場所に幽閉されていたの。すぐに開放されたけど、次に行かされたのは『白の世界』。簡単に言えば悪魔の収容所。更正をする場所。私はそこから出て来たのよ。そして時は過ぎる。人には永遠とも思えるほど長い時間を経て、あいつに会つた。この世の悪の、闇の根源」

「『化け物』ってやつか？」

一段落話がついたようなので、翼は口を開いた。『化け物』の正

体それは、

「大天使、それと同等の力をもつ者。ある意味にすら脅威を覚えさ

セウス

せる存在ね」

いきなり神話上の者が出てきて、翼は何と言葉を続ければいいのか迷つた。あまりにも話が大きすぎる。人間の自分に何ができるのだ。それに信憑性というものがこれっぽっちもない。

「驚いてるわね。話が壮大すぎる？ でも真実。信じるしかない」「それで？ 何で悪魔のくせにそいつを倒すんだ？」

「あいつの理想は悪魔のものとも、神のものとも違う。願うは混沌、従うは憎悪。私の目指しているものとも違う。もちろんそれに従う悪魔もいた。どちらかと言えばあいつの理想は悪魔のものに近かつたから。あくまで近かつただけ、だから従わない者もいた。でも従つた悪魔が多すぎた。悪魔の戦力は一時的にはいえ、半分以下になつた。そこを神官たちは狙つた。お陰で悪魔はほぼ全滅。悪魔は歴史上この世から掃討させられたわ。すべてはあいつのせい。だから私はあいつを殺す」

今の真咲の口調は有無を言わせぬものだつた。田は細く開けられ、当時のことと思い出しているのだろうか。

つまりは同胞の復讐とでも言つのだろうか。

翼は彼女が話を終えるまで無言だつた。先ほどのように混乱しているのではない。真咲の言葉が衝撃的だつた。

「ま、所詮、私も復讐のために戦つてはいるんだけどね

「『も』？」

「そうよ。あいつも復讐のために戦つてはいる。そういう意味では同

類ね」

「……そうか」

真咲はそれ以上話さなかつた。雰囲気がそうさせたのか、それ以上話したくなかったのかはわからない。でも一つだけはっきりした。

「お前、実は寂しがりやだろ？」

そのときの真咲の顔はまさしく鳩が豆鉄砲くらつた顔だつた。田

常でこんな顔をされたら思わず吹き出してしまつだろ？

「な、何言つてるのよ？」

「いや、気にしないでくれ」

「無理よ。つて言つて何でそんなこと訊くの」

「だつてさ、五百年も一人だつたんだろ?」

「図星だつたらしく、真咲は押し黙つた。

「しかも今のお前、悲しそうだつた」

互いにつつむき、沈黙が続く。

「そつ……でも違つわね。五百年も一人だとそんなこと関係なくなるものよ」

真咲は顔を上げ、翼をまつすぐに見据えた。

「…………」

今度は翼が黙つた。真咲が無理をしているようにも見えたからだ。自分でも他人をこんなふうに見るのは初めてで、おかしく思えた。まるで前から彼女の事情を知つていたかのよつな。

「さあて、そろそろ帰ろうかな……。もう三時よ」

立ち上がり、スカートの形を整えた。その後ろ姿を翼は呆然と眺めていた。と、風に流れる前髪を押さえながら真咲は振り向いた。

「どうしたの?」

「……何でもない。それで? どうやつて帰る?」

「ふふふ、飛んで、よ」

真咲の背中に再び漆黒の翼が顯れた。悪魔を連想させる皮膜状のものではなく、柔らかそうな天使の羽だつた。ただその色は深い黒。「と、その前に……」

翼の横に屈みこむとポケットからハンカチを取り出した。それで翼の右ひじを押さえた。ハンカチには徐々に赤いしみが広がつた。

「あれ? いつの間に」

「どつかで擦つたんでしょ。さつきから血が出てて、見てるこつちが痛いわよ」

階段に座る翼の足元には血溜まりができるた。

「うわっ、なんかこれヤバいんじや……」

「大丈夫よ。あなたはこのくらいじゃ死なないわよ」

「それって、どういつ……」

こればつかだな、と思い翼は口を閉じた。

「お前が言うならそうなのかもな、真咲」

真咲は口の端を上げて笑むと、漆黒の翼を広げた。

## 第一章「黄金の鎌・漆黒の鎌」・1（前書き）

第一章の幕開けです。ついに姿を現わす翼を狙つ悪魔の正体とは…

⋮

## 第一章「黄金の鎌・漆黒の鎌」・1

「黄金の鎌・漆黒の鎌」

「ぐぬわ……ペルルヤ、ミルヤ……ぐしゅ

！」の世のものとは思えない音。奇音。漆には濃い血の匂い。お世返のよつな……。

「ぐれゅ……ぐれゅ……ぐれゅ……」

まだ続く。まだ、まだ、まだ。

吹き出る血、そして闇。

「ぐじゅる……ふじゅ……」

それは誰も知らない世界の闇。日常の影。

闇は立ち上がった。長身で細身。足元と思われる場所にはじす黒い血溜まり。闇の根源は人形で顔に当たる部分からは血が滴つている。もちろん本人のものではないだらつ。

「

その口から紡がれるのは人外の言葉。真咲やシルフィードが発するものとはまた違った響きがある。ひとつとした、まるで一度聞いたり忘れないような心の底にまとわりつくな言葉。

「

言葉はさらに続く。

突然、血溜まりが光を帯びだした。緑色と黄色の中間のよつな色。黄緑とはまた違う。それも薄つすらとしたものだ。

「 言葉に呼応するようにして光は増す、もしくは減る。人の形をしたものは手を挙げ、オーケストラの指揮者とまではいかないが、リズムを取るように動かした。」

「 紡がれる言葉の調子が激しさを増す。」

光は血溜まりを抜け、人影の口元へ吸い込まれる。一瞬、光の量が爆発的に増えた。

それきりだつた。

光はなくなり、人影は消えた。血溜まりだけが残つた。

今日も悪夢だった。冷や汗が服と肌を貼りつかせていた。連日のように見る悪夢。

ここまで見てしまつとそれが事実であるかのような錯覚を受ける。梓は布団から起き上がりるとカーテンを開けた。まばゆい光が差し込み、目を細めた。

リリリリリリリリ。

セットしておいた目覚まし時計が鳴り出した。どうやら今日はいつもより少し早く起きていたみたいだ。

「はあ……今日もいい天気……」

なぜかため息が出る。最近調子が悪い。

「梓、起きたの？」

伸びをしていたところに姉の高麗知じぱねが部屋に入つて來た。梓よりも一つ年上だ。同じ高校に通つている。

「え？ あ、うん」

「今日は朝から打ち合わせでしょ？」

「それは昨日……つてあれ？ 今日何日だっけ

「ちょっと、何言つてるのよ」

梓はちらりと卓上のカレンダーを見る。デジタル文字盤つきのわりと高かつたやつだ。

あれ？

何かおかしい……けれど、何が？

「あはは。そうだった。今日は朝早くたのよね

「そしたら早く着替えなさい」

「はい」

高麗知が出て行くのを確認すると服を着替え始めた。

「うつ……つ」

頭痛がした。一、二日前から頭痛がする。おかしいと思ったが医者には行つてない。家族にも心配をかけるまいとしてしたことがだが、ここまでくるとさすがにまざい。

おかしいといえど、昨日何をしていたかを覚えていない。むしろ今日と同じことをしていた気がする。姉が入つて来て、学校に行って打ち合わせをする。それで……

デジヤヴ？

「おかしい……」

まだおかしいことはある。自分が自分でないよううな気がする。テレビ番組か何かでこういう症状を見た気がするが、内容を忘れてしまつた。

「ま、シャワーでも浴びてさつぱりしようかな」  
パジャマを脱ぎきつたといひでそう閃いた。

「うん。そうしようと」

ハンガーにかけておいた制服を取るとドアを開ける。顔を出して外を一応確認する。一応というのは今の時間、梓の家には男はないからだ。いるのは彼女の母と姉、妹の四人だ。父親もこの時間家にいない。

「うん……今日の朝は洋食かな？」

キッチンからはハムの焼ける匂いがしていた。  
梓はバスルームのドアを開けた。

ＰＰＰＰＰ・ＰＰＰＰＰ……ダンシ、ガチャ。

手探りで、といかいつも通り目覚ましを止めた（叩いた）。

翼は寝覚めがいい方だ。新明に比べれば断然にいい。

「ん……うう……」

寝転がつたまま伸びをする。手がベッドの柵に当たるがいつものことだ。そのまま起き上がりうと手をつく。

「あ……うん……」

何か妙に柔らかい感触。

（……こ、これはまさか。これも王道か……）

恐る恐るではあるが、視線を自分の左に向ける。

「い、いつの間に……」

そこには無防備な寝顔でいる真咲が寝ていた。

そしてこの部屋は学富学園の寮。基本的に学園の寮は学校と同じく男女両方が住んではいるが棟が違う。ちなみに一人一部屋が割り当てられている。贅沢だと言えば贅沢だ。ただし成績が悪ければ大部屋に移されることもある。

翼の部屋は……わりと片づいていて足の踏み場がないというほどではない。高く積み上げられた雑誌。十五インチほどのテレビに各種AV機器、ゲーム機器。これほど揃っている部屋は翼を除くと学校に残り数人しかいない。これまた贅沢の一つ。だがばれたらまずい。

「……こつちもばれたらまずいな

翼が真咲の横顔を見下ろしていると、

「うう……ん……」

「起きたか？」

しばらく真咲はぼけつとした顔で目を半開きにしていた。

「おはよ」

間延びした声。昨日の凛とした声が嘘のよつだ。

だが、彼女の目に驚愕の光が浮かぶ。

「…………つて、え…………うもー」…」

叫びきる前に口を押された。翼はこのまま気を失つて欲しいぐらいでもあつた。

「ん…………もー」あ…」

暴れるので仕方なく手を話す。真咲も状況がだいたい理解できたのか声を小さくする。

「まさか、起きたら隣にいるなんてね」

心底驚いたように言うが、実際は……

「あのなあ、昨日押しかけて来たのはお前だろ？が、真咲

「そ、そうだけど……」

と、わけもなく赤面したりする。

「それになあ……」

翼は顔を近づけ、真咲の額に人差し指を押しつける。

「うう」

「お前は上で寝てたろ？ それが何で下にいるかな？」

翼が使用しているのは一段ベッド。入学の際、家にて姉弟で使っていたものをそのまま持つて来たからだ。たまに遊びに来るクラスメート用に一段目が使われているのだが、昨日は帰つて来てから真咲とずっと一緒にだったので、真咲に一段目を使わせた。自分の部屋に追い返してもよかつたのだが。

『それは無理よ。私の部屋はないわ』

そのときはあまり時間がなかつたのでそれ以上追求はしなかつた。

今は別だ。

「ま、いいけど。それより何で昨日は俺の部屋じゃなきやまづかつたんだ？」

そう言つと真咲の顔から先ほどまでの憤然としたものはなくなつて、逆に戸惑つたようになものになつた。

「や、れは。昨日、ちょっと派手にせりやつたじゃない？ だから、全員の記憶を消したのよ」

「う言い、手をぱーっと広げる。

消した。消した。消した。……『テリート？

「……おーおいおいおい。それはさすがに、驚きだな」

も理解する……といつか彼女が言つのだからそつなのだひつと、

半分開き直つていた翼は適当に相槌を打つた。

「でしうね。昨日の記憶を消して、私は今日から転校つてことになつてゐる。だから、ね？」

「ね？ ジゃない。今回だけだぞ」

「そのつもりよ

真咲はにっこりと微笑んだ。これが、本当の魔の微笑みなんだ  
うづ。

簡単に朝の食事を済ませると、翼は玄関から、真咲は窓から登校した。なんだかやり慣れてこむよつに見えた。

「昨日のことがないつてことになると、迂闊に変なこと言えないな  
「よつ！」

翼の肩が叩かれた。振り向くと頬に人差し指が当たつた。新明だ  
つた。

「今じろそんなの誰もやらねえぞ」

「ま、いいじやん。それより、行くぞ」

「ああ。それより新明

「ああん？」

「今日つて転校生が来るつて話だぜ？」

「は？ どつから仕入れた、そんな情報。なんことあるわけねーべ。  
こんな時期に」

「無理もないか。

だいたい「ねーべ」つて、と翼は苦笑した。

翼たちの暮らしている高等部第一寮から学園のある駅までは片道五分。

だいたいなんで学校の寮から電車通学やねん、と最初は突っ込んだものだが、今では帰りに遊べるし、と思つことにした。

さらに電車で一駅。特に話す話題もなく駅に着く。

『次は～学富学園前～、学富学年前～』

「バスじゃねえんだからな」

「まったくだ

そんな意味のない会話を校舎につくまで続けた。

「梓はどうした？ つて生徒会だつたか

翼は上履きをロッカーから出ししながら独り言のよつよつぶやいた。

「ん？ そのこと言つたか？」

「いや……」

翼は何となく記憶を消すつてのは昨日をまたやり直すつてことなんだろう、と思つた。もしくは消した分に新しいものを上書きするのか。

朝からデジャヴを見ている感じだ。

「翼つ！ 何？ あたしの話してた？」

「ん、まあそんなど」

「なによー、翼。はつきりしない」

梓は頬を膨らませ、翼を小突いた。その間にも翼は先に進む。

「それで？ 用事つてのは何だったんだ？」

新明が梓に並びながら訊く。

「ああ、今日転校生が来るのよ。それでクラスをどこにするかなつてやつ」

「翼の言つた通りだな、おい」

「え？ 翼、転校生のこと知ってるの？」

意外そうな表情で梓は翼を見上げた。梓は翼とちょうど頭一つ分違う。翼は頷いて受け流した。

「で、その転校生ってのは何組に来るんだ？」  
新明の方は興味津々で話に食いつく。

「うちのクラスだよ」

驚いたのは新明だけだった。

教室に入ると隣の席は梓のものだった。こちらが声をかけないでいると彼女の方も大して気にしない様子だった。そういう性格なのだ。

少し経つと担任の荒崎が入って来た。一人でだ。廊下では真咲がスタンバってるのだろう。

「一回目つてのはしんどいな」

翼はため息を一つつくと、窓の外を眺めた。

気がつくとHRは終わっていた。

「翼も行こうよ。天城さんトコ」

「ん、ああ」

梓は乗り気で、翼の腕を引いた。

真咲は昨日 それがあるのは真咲と翼だけだが と同じ質問攻めにあつていた。

その先頭はもちろん新明。集まるのはほぼクラス全員。

「ねえねえ、翼も連れて来たよ」

「お？ 来たか。お前が最後だぞ」

どうやら全員自己紹介をしていたらしく、翼が最後ということだ。

「あ、つと」

強引に押し出され席を囲んでいる一番前に出される。

「天城真咲です。HRの時間も外向いてたんで一応私から自己紹介しちゃいます」

ちょっと嫌味が入っている気がするのは俺だけだろうか、と思つ

翼。

「ああ、折笠翼だ。一応自己紹介しておく」

面倒くさそうに頭をかきながら言った。あくまで一応。

「なんだよ。一応つて」

「ああ、何でもない」

と、ちよつといつこりで一時間目始業のチャイムが鳴つた。

「ねえねえ、今日は食堂行かない?」「昨日、テレビで」「悪い、金ねえや

「え、お弁当作って来ちゃった」「マジで? それって」「あれあれ最近」「まずい! 僕も金欠だ!」「ははははは

「おしかつたよなあ」「今月パケ代がさあ」「おつ、出た出た」「

昼休み。雑談に紛れるようにして翼は真咲の席まで行つた。

真咲は席につき食堂で販売されているやきそばパンを食べていた。

翼はもう食事を済ませている。

「真咲、少し話がある」

「ん……そろそろ来るころかと思っていたところよ。少し、待つて」「傍らにあつたパックを掴むと中身の牛乳でパンを流し込んだ。

「……さて、なるべく人気がないとこがいいんだけど?」

「それなら心当たりがある」

翼は足早に廊下へ出た。真咲もそれに続く。

「どこに行くの?」

「屋上だ。普段は力ギがかかるつていて誰も入れない」

屋上は翼たちのいる校舎にはなく、東館という別館にある。教室と同じ階に連絡通路があり、そこから行くことができる。屋上にはテニスコートが二つ引かれて体育の授業に使つたりもする。「それで? カギがかかってるのにどうやって開けるの?」真咲は屋上に出るための扉の前に立つた。

「これがあるんだな」

ポケットから針がねやら鉄の針やらがついたキーホルダーを取り出した。

「そんなの持ち歩ってるの？」

「悪いか？」

「ベンよ」

真咲が言い返すのとほぼ同時にカギが音をたてて開いた。たまにしか開けないのか扉は重く軋んだ。

「今日、五時間目に使われる予定はない。それにここは他よりも高いところだ。他から見られることはない」

「そんなことわざわざ声に出して確認することじやないでしょ、誰に言つてんのよ」

一人はテニスコート脇にあるベンチに腰をかけた。

一年ほど前までは昼休み中にこの屋上を開放していたのだが、何かの事故で普段は閉鎖するようにしたのだと翼は聞いていた。

今日も快晴だった。梅雨の中休みは今日で最後らしく、週間天気予報では明日から一週間雨続きになるらしい。直射日光が厳しいがベンチは日除けの屋根がある分少しあしましだった。

「話つてのは、何からすればいい？ 昨日は全部話せなかつたからね。……それとも私のこともつと知りたい？」

ふざけたような調子でそう言つ真咲に翼は首を横に振つた。

「連れないのでね」

「……まずは昨日のシルフィードとかいうやつのことから頼む」「シルフィード、ね。あいつがいるのは対魔用聖警察の『ヴァイス・エンジール』よ。表向きには公表されていないものだけど、だいぶ昔から存在していて、本部は日本国外にあるの。それに正確には警察ではなく、それを隠れ蓑にしているにすぎないのよ。そしてシルフィードは部隊長。『マンダード』こと」

そこまで言うと一度言葉を切った。翼はまだ訊きたいことがあった。

「何者なんだ？」

「それが一番の問題ね。うん、そうね。私と同類。でも悪魔じやない？」

「？」

「精霊以上の魔人未満の存在ってどこかしら。でも魔人と同等の力を使うことができる。まあ天使に近いかもしれないわね」

翼はよくわからなかつたが、

「魔人つてのはお前みたなのを言うのか？」

「簡単にはね。もつと詳しく話してもいいけど、今はちょっと理解に苦しむかもよ？」

「なら、いい。面倒な話は苦手だ」

「ま、早い話、私を狙っている。そしてもう一人。彼女の契約者の白河大輔。<sup>しらかわ・だいすけ</sup>こいつは曲者よ」

翼はここでシルフィードは女だったのだと思つた。どうも中性的な声や顔立ちだったためわからなかつた。

「あの後ろにいた銀髪か？」

「そうよ。あいつについては詳しくは知らない」

「……はつきりしないな。それで、何で狙われてるんだ？」 昨日は

あっちの手違いかと思つてたけど……間違えて手配するよつた連中  
でもないんだろ？」「

真咲は首を振つた。

「…………わからない」

「何で？」

「寝てたのよ。十年前まで百年間……」

しばらく間を空けて、真咲は一息に言つた。

「あ、それは、まあ、寝る子は育つてか？」

「…………五月蠅い」

翼は今の言葉に押し殺したような殺氣を感じた。

「…………まあ、そういうことにしておこう。で、何だっけ？ 聖警察

？」

「正しくは滅魔を掲げる『聖滅魔専用部隊上級魔昇華中隊・極東支部』

「…………覚えられねえよ。それが何かの理由で真咲を追つているわけだ」

「それにあなたもね

「俺も？」

翼は自分を指差し、首を傾げた。

「そう。あなたに秘められている魔魂と呼ばれるものを求めてね」「まこん？」

「読んで字の通り、魔力のこもった魂のことよ。悪魔やそれに類するものはそれを糧として生きているの。もちろん魔魂を求めなくとも普通の人間の魂にも魔力はあるけど、魔魂に比べれば微少。本当にごくわずか……と言うよりないに等しいわね。だから魔魂をもつ者がこの世に現れれば必然的に狙われるのよ」

真咲は暑さをしのぐように手で顔を仰いだ。前髪が汗で額に張りついていた。

「なるほど。でも今になつてか？」

「おそらく、覚醒したのね。魔魂が……」

ちょうど休みの終了のベルが鳴った。続いて重い鉄扉の開く音。

「あ！ 翼、ここにいたんだ！」

翼と真咲に声をかけたのは息を切らした梓だった。構内を走っていたのか頬が紅潮し額に汗粒が浮かんでいる。

「お？ 梓、どうした？」

「倉本さん？」

二人はベンチを立ち上がりて訊ねる。

「あれ？ 天城さん……あはっ！ 一人でいっしょにいるなんて、いろんな意味でラッキーかも」

一瞬きょとんとした顔になつたが、すぐに笑顔になつた。

「そんで、何かあったのか？」

「そうそう、今日の放課後、ヒマ？」

「たぶん、ヒマだと思う」

「私は大丈夫よ」

「ならさ、天城さんの歓迎会をしようつてことになつたんだけど……」

「いつの間にそつなるんだ、と翼は思つたが、

「別に構わないぞ」

「それは……ありがとう」

真咲は嬉しそうな笑みを浮かべた。それに応えるように梓は笑う

と、

「どういたしまして……」

そしてくるつときびすを返す。

「……それと早くしないと次の授業遅れるよ？」

梓の手には次の授業用の教科書やノートがあった。よりによつて

クラス移動のある授業だ。

翼は腕時計を見た。授業開始まであと一分。くそ、完全に忘れていた。

日は西に落ちかけ、雲も空もだいだいで染まっていた。その様子はつつくしく見入つてしまいそうであった。

クラスの窓は西側についているため日差しがもろに入り込む。中では生徒が歓迎会の下準備をしていた。

どうやら真咲が来る前から話は進められていたようで、飲食物はもちろんのこと部屋の装飾もなかなかのものだ。机を部屋の真ん中に集めて、生徒はそれを取り囲むようにしている。一応希望者のみの参加だったのだが、クラスのほとんどが出ていた。

「ええ、こほん。では、みなさん、コップを手に取ってください」幹事兼司会を務めるのは新明である。参加したクラスメートにはプラスチックのコップが渡されている。

「まずは最初に本日の主役である天城真咲さんに乾杯の音頭をお願いします」

新明はどこから持つて来たのか、おもむやのマイクを真咲に手渡した。あの声に変なエコーがかかるやつ。

「あ、はい。ええと、今回は私のために集まつてもらつてありがとうございます。それでは……かんぱーい！」

『かんぱーい！』

乾杯の掛け声を終えると真咲は全員の質問の標的になれていた。翼は全員の輪からは少し離れた場所にいた。窓を背にしている。横には梓もいた。

「朝の生徒会つてのはこのことだったのか？」

「そうよ。でも生徒会つてのもつそ。ただの打ち合わせと下準備。ごめんね」

「いや、謝る必要はないよ。ただつかのクラスはこのことだが好きだなって思つてな」

「それって翼が言えないよ」

「はは、そうかもな」

翼は苦笑するとコップに口をつけた。梓も飲み物を一口飲む。

「……和貴つてああいうこと得意だよね」

梓はコップを持った手で、教卓前を陣取る新明を指差した。身振り手振りを加えて何やら熱心に話している。

「昔から人前に立つのが好きだったからな。それに天性つてものがあるのかもな。結構積極的なところあるし、あいつ

「え？ それってどういうこと？」

「浮気されないようにつてこと」

そう言う翼に梓は声を上げて笑った。

「あははは、翼にそんなこと言われるなんて思わなかつたな。そうだね、気をつけないとね。今日も天城さんに声かけてたし……」

「真咲でいいわよ」

突然、梓が声をかけられた。いつの間にか集団を抜け出していたらしい。

「あれ？ 天城さん」

「名前でいいって。その代わり、私も梓つて呼んでもいい？」

梓は真咲の言葉ににっこりと微笑むと、

「いいよ。改めてよろしくね、真咲さん」

そのときの梓の笑顔は本当に喜んでいるものだった。昔から付き合っている翼は、いつもが彼女のかわいいところなんだなと思ったこともある。

「ん~『さん』はいいんだけどね」

「いいじゃない。そういうばさ、お昼休み一人で何してたの？」

「え？」

梓の言葉に一人は異口同音に応えた。

「あやし~な~」

上田使いに意地悪そうな顔で翼を見る。いつもに童顔は有利だ。むしろセコイ。

「そ、そんなことはねえって。ちょっと校舎を案内してただけで……」

「へえ。……ま、そういうことにしておいてあげるわ」

「あら？」

まだからかわれるかと思っていた翼は肩透かしをくらった形になつた。彼女にしてはやけに退くのが早い。

「今日は真咲さんの歓迎会だし。みんなの視線も気になるしね」  
教卓前でビンゴ大会をしていた参加者の面々の視線が三人に向かっている。主に男子を中心としたもの。

「あ~、何でもないのでどーぞお続けください」

翼は変な殺気のこもった視線を、手を振つてなだめる。

「じゃ、あたしがあつち行ってこようかな」

梓は手に持つていたカツプを翼に渡した。中身が半分ほど入っている。

「何するんだ？ つーかこれどうすんだ？」

「ビンゴよ、ビンゴ。それ飲んでもいいよ

「あ、そう」

「しつと答えると一口飲んだ。

「あ！ ホントに飲んだ」

「悪いが？」

梓は「ほーっ」と意味ありげな、感嘆したような声を上げると駆けて行つた。教卓前ではさつそく梓を中心として第一回ビンゴ大会が開かれている。

「何なんだ……」

真咲は呆れ顔で翼を見ていたが、一つせき払いをすると、

「梓とはいつからの付き合い？」

「小学校からだな。三年のときに転校して來た」

「そうなの……」

翼と話ながらも視線は梓に向けられている。

「どうした？」

「いえ、きっと気のせいね」

そうは言つたものの彼女の視線は教卓の上に立つ梓に向けられていた。

『おーっと、今、梓ちゃんが見事にビンゴです！ では、一等商品のぬいぐるみをどーぞ。ちなみに佐久間が取つたものでーす』  
新明がマイクでビンゴ大会の司会進行もする。隣では梓が縦一列にそろつたカードを掲げている。見事にビンゴだ。それにトリプルリーチだつた。

「わあ！ タツスガサクちやんだね。今人気のぬいぐるみじやん？」

「コレ」

梓はぬいぐるみを佐久間（このクラスのクレーンゲームの自称プロ）から受け取つた。クマのよつたなネコのよつたな動物だ。この世の

ものとは思えない。

「さて、と。俺は帰るかな」

「何でよ。もう少しいてもいいんじゃない?」

真咲が翼を引き止めようとしたとき、教室のドアが強引に開かれた。

「お前ら! いつまで騒いでいるつもりだ!」

入つて来たのはこの学校の教頭だ。入学式当時は髪が寂しい人だつたが、今では十年少し髪が若返つていいのではないのだろうか。無意味な努力だな、ずれるだろうし、と翼以下クラス全員はそう思つてゐる。神経質そうな顔つきで細いフレームの眼鏡をしている。

「教頭?」

クラス内でざわめきが起つる。

それもそのはずだ。いきなり、怒鳴られては誰でもそうなる。

「倉本。どういうことだ? 今日は文化祭の準備をするんじゃなかつたのか?」

驚きの表情をする梓に教頭は訊く。

「あ、そういうことか……」

クラスの中で最初に現状を理解したのは翼だつた。

「はは、これは……ですね」

言い訳を言い出すような切り出しど、梓は口を開いた。口はぱくぱくと魚のようになに動くだけだ。

「教頭! 大変なことになつたんですよ」

と、声を上げたのは新明だ。

彼もこの状況を理解したらしい。

強引にも教頭と肩を組むと廊下に出た。やや演技が大きさのはこの際目をつむる。う。

「相変わらずむりやりだが、今のうちだな」  
翼は教室のベランダへ通じるドアを開けた。そして我先に脱出す  
る。

「あ、私も……」  
横にいた真咲が続く。それに教室にいた生徒たちも。  
最後は梓だった。

「新明君は大丈夫なの？」

「ああ、あいつはそういうところタフだからな」

翼と真咲、梓は並んで歩いていた。ベランダに脱出後は他クラスから下足ロッカーへゴーだつた。

「ごめん。あたしのせいで……」

梓は一人から三歩ほど後ろをついて来ていた。うつむき加減に歩いていて少し危なつかしい。

「別にかまわないが、何ではつきりと言つておかなかつたんだ？」

立ち止まり振り返る。梓もあわてて歩を止めた。

「前から頼んでたんだけど、了承してもらえないでね。それで無理矢理」

翼は大きく一つため息をすると梓の額を指で小突いた。

「そういうことなら俺たちに言つてからにしろ。梓は前々から全部一人で溜め込むようなことをすつからな。たまには人も使え」

「そんな……」

どこか悲しそうな表情をする梓。

「い・い・か・ら。そうしどけ」

そう言つと再び歩き出す。今度は翼が少し前を歩いている。

「梓、気にしなくてもいいよ。私たちあれはあれでおもしろかったし」

真咲が声をかけても梓はうつむいたままだ。

「……今日、私の部屋で夕飯食べない？」

「え？」

「ヒマだつたらでいいけど。歓迎会もあんなになつちやつたし、ね、いいでしょ？ 料理は私が作るから？ 翼もどう？ 二次会つてことで」

翼はびっくりでいいと言ひついで手を挙げた。  
最終的に真咲は寮ではなく、マンションを借りることにしたらしい。  
『借りた』かどうかはあやしいが。

「その前に一回寮に戻つてもいいか?」  
振り向き、真咲にそう言つ。

「あ、それならあたし、一回家に戻つてもいい?」

梓は顔を上げると訊ねた。

「いいわよ。そういうえば梓は家から通学してるのよね」  
思い出したように真咲が言つた。確かに梓は学園では珍しく家から通学しているのだ。彼女の親が著名であるためその家は豪邸そのものだとも翼は知つていて。

「うん。親にも言っておかないといけないし」  
「そうね。じゃ、早く帰りましょ」

真咲が梓の手を取る。

「あつ……」

その瞬間。  
音がした。

表現しようのないような。生まれてから初めて聞く音。堅い音ではない。柔らかい、粘着質のある音。

次に思つたのは、それを聞かなければよかつたといつこと。そして振り向かなければよかつたということ。ただの街の雑音、人の声、その中の一つとして聞き流してしまえばよかつた。

「え?」  
「ん?」  
「何?」

「！」

振り向いた三人の視線の先には、何かの塊があつた。黒いとも赤いとも取れる。布のようなものがまとわりついていた。さらに言えば塊を中心として赤い染みが広がる。とろりとした液体。まっさきに動いたのは真咲だった。塊の近く、彼女たちが歩いていた道の横にある駅ビルの屋上。薄紫色になつて来た空を背景に光

るネオンの先を見上げる。

「これって……」

梓が塊から発せられている、むせ返るような濃い空氣に口元を覆う。翼も顔をしかめる。

「……人間だよな？」 真咲

翼は苦虫を噛みつぶしたような顔で真咲を見た。原型を留め切つてはいないが、翼の言う通りだろう。切り刻まれたような痕が無数につき、血が表面を覆い肌の色がどす黒く見える。むせ返るような空氣には血の匂いがこもっていた。

真咲は頷くと、

「そうよ。それにあれ  
真咲の指差す先。ビルの屋上。  
「何もないじや？」

「…………わかった？ あなたも魔力がわかるはずよ」

真咲がそう言い指差す先

確かに翼の目にも魔力の強い場所がわかつた。それは真咲と契約をしたせいか、もともと素質があるのかは定かではないが、ただ『何か』がその場所からはつきりと感じ取れた。

「やはり使徒…………かしらね」

「使徒…………？」

聞き慣れない単語に翼は首を傾げる。

「ええ、魔魂を狙う『化け物』の使い魔よ。それも、もしかしたら本体かも…………。これまでに強いなんて…………とにかくあそこまで行つて確認してみないといけないわね」

真咲が駅ビルに入ろうと歩を進めた。

ゴウン

そのとき、突如頭上高くで輝いていたネオンが音をたてて落下してきだ。

落下先には梓がいる。

絶対に避けられないタイミング、そして位置。

「あぶねえ！」

翼が叫ぶより早く、真咲が跳んだ。

「きやあ！」

状況を把握しきつていない梓は真咲に抱きかかえられる形でネオンの落下を回避した。

「ゴツツツツツツ…………！」

一拍おいて火花を散らすネオンが地上に叩きつけられる。すさまじい爆音に通行人も振り返る。

真咲は手近な場所に梓を降ろす。

「梓、お前はそこにいてくれ」

翼は、口元を押さえたまま近くの街灯に身を預ける梓にそう言い残すと駅ビルに駆け込んだ。微かに梓が頷いたのが確認できた。塊の周りには徐々に人が集まりつつあつた。カメラつき携帯を取り出す者。顔を背ける者。反応はそれぞれだった。

その中で梓は何かを確かめるように屋上を見詰めた。

第一章「黄金の鎌・漆黒の鎌」・13（前書き）

第一章も中盤です。このまま一気に進行をや止まら（笑）

翼がエレベーターホールに入ると、真咲はすでにエレベーターの昇りボタンを押していた。

「真咲ッ、ここの中のエレベーターはなかなか来ねえぞ！」

エレベーターホールを通過しながら翼が叫ぶ。真咲もそれに続く。目指すのは地上十一階の上にある屋上。手段は非常階段。

「うおおおおおらああああああああ

！」

氣合のかけ声とともに一気に五階まで駆け上がる。そこまで来ればさすがに翼は息を切らしていた。

「ぜえ……うへ……はあ、翼！ ナイスタイミング！」

真咲は非常階段の扉を開けた。エレベーターホールにちょうどエレベーターが到着していた。先ほどから真咲はこのタイミングを狙っていたのだ（かもしれない）。

滑り込みに入る。中には誰もいない。最上階のボタンを押すと窓から外を見た。ちなみに最上階はレストラン街だ。

「梓は大丈夫か？」

独り言のように翼がつぶやく。

「心配しなくとも大丈夫よ。彼女なら

「何でそう言い切れるんだ？」

「あの子も……魔と関係する力を持っているわ」

真咲がガラスに手をつきながら、翼に向き直る。翼は一瞬戸惑つたような表情を浮かべたが、

「そうなのか？」

「ええ。どうやら、あなたの周りには特殊な人が多くいるようね」「確かに、そうかもな」

苦笑して応えた。

「お前も……その一人だろ？」

「そうね」

真咲は微苦笑した。

「それで？『化け物』ってのは何者なんだ？」

翼の問いかけに真咲はゆっくりと口を開いた。

「この世の生と死を司る者。『死神』と称される者よ

「漠然とし過ぎてないか？」

翼の死神のイメージはロープをかぶつた骸骨で大きな鎌を持つて  
いる、といったところだ。

「仕方ないじゃない。真実なんだから」

仕方がない、と言おうと翼はしたが、ちょうど十一階に到着した。軽い衝撃とともにエレベーターが停止する。屋上には再び非常階段を使う。

屋上のドアは端がさびついてはいたが、重く軋む音がして開いた。  
「どにもかしにも、つたくちゃんと整備しとけよな」  
翼は愚痴りながらも外へ出た。

ぎち……ぎち……

貯水タンク。エアコンの室外機。何かわからないがフェンスで囲まれた機械。いくつものパイプ。

ぎち……ち……

「おい、真咲、何だか足元がおかしい気がするんだが？」  
翼は先ほどから音を立てているのが自分の足だといつことに気がついた。

「そうね。できるだけ聞かない、見ないことをおすすめするわ」

「……？」

疑問符を浮かべる翼。

真咲は彼にお構いなしに進む。

地上から見上げた場所は屋上出入り口の反対側にあった。貯水タンクを回る形となつたので最初、その姿がタンクの陰に隠れて見えなかつた。

りりーん。

鈴の鳴るような、涼しげな音が聞こえた。風が音をつれて真咲の髪を撫でる。

それはそこにいた。

そこはネオンがきらめく看板。

その裏。まるで白と黒。相反するもの、光と闇のよつたな場所。一人の少年がいた。

彼がいる位置はちょうど落下したネオンのあつた場所だ。

真咲が絶句するのが雰囲気でわかつた。

顔立ちはまだ幼く、歳は十代前半もいことじで、十一、一二ぐらいだろう。耳までかかる黒い髪。身長に不釣合いな黒いロング「パート」を着ている。全身黒ずくめ、その身で光るものは耳からイヤリングのように垂れる金色の鈴。そしてそれと同じ、金色の瞳。光のない金色の瞳。

「やあ、きみたちも来たのかい？ 星がきれいなんだ」

少年がこちらを見ずに口を開いた。顔は空を見上げている。口から漏れる声はボーカン・プラノのように高かつた。透き通るようにな美しい声。

一人も空を見上げた。

空に星など見えない。見えるはずもない。

「おかしいね。空にはあんなに星があるのに……それを誰も見よつとしない……」

まるで独り言をつぶやくような口調。いや、本当に独り言として言つているのかもしれない。そして静かだが他人を納得させるような調子。

「やはり、ここに資格を持つものはいない」  
そこまで言つと、翼たちの方を向き直つた。

りりーん。

耳についた鈴が鳴る。

「今は、真咲って呼べばいいのかな？」

「ええ、構わないわ。それで、あなたはなんて呼ばれたい？」

「そうだね……シェイドなんてどうかな」

何年もつき合つた友人のような口調で一人は言葉を交わした。だが間に漂う雰囲気は親しい者同士のものではない。

「隣にいるのが翼君か。魔魂の所持者。初めまして、だよね」

いきなり話を振られて、翼は一瞬だじろいだ。

「……ああ。随分とちつこいんだな。『化け物』ってのは「外見に騙されちゃだめよ。問題は本体。その力なんだから、それに……こいつは私の言つ『化け物』じゃないわ。まあ、もともとどちら側だつたけれど、もつと厄介よ」

真咲の声がいつも以上に緊張していることに翼は気づいた。

「あはは、随分と仲良くしてるんだね？」 真咲

言葉は真咲の台詞を遮るように出た。シェイドと名乗る少年の外見、口調は子供そのものだが、その金色の瞳から発せられる静かな殺氣ともいうべきものは本物だった。

「それに……僕が斬つた傷、再生したのかな？」

「何年前の話をしているのかしらね。それにあなたもあれだけの肉片からよく戻つたわね」

真咲がしつと応えると、シェイドはいつだつたか思い出すようになに首を傾げた。

りりーん。りん……

鈴の音は涼しげに響く。

「ん……十年ぐらい前かな。よく考えたらだいぶ久しぶりだったんだね」

「そうね。それで？ 言いたいことはそれだけ？ 今回は前回よりも多くの肉片に変えてあげるわ

あくまで冷たい口調で言い捨てる。

そして縦長に伸びた赤い瞳でシェイドを睨みつける。

真咲の横で翼は呆けたような顔で立っていた。シェイドは真咲の殺氣のこもった視線を手で制すと、

「翼君は何も知らないみたいだけど?」

興味があるようにシェイドは語りかける。その自然な言動に翼は思わず頷いてしまう。小さく真咲が舌打ちするのが聞こえた。

「突然のことばかりだつて顔してるよ。真咲つてけつこうノリで突き進むタイプだからね。苦労するでしょ? 着いて行けないっていうから……」

「……だから裏切ったのか?」

シェイドは翼の言葉に意外そつた表情を作った。

「へえ、ある程度は聞いているみたいだね。そう、その通りだよ。正確には目的の違いもあつたけどね。所詮、真咲は墮天使……『元』天使。完全に悪魔の目的を理解したわけじゃない。組織の頭としてこれほど適さないやつはいないよ」

真咲が苦笑で満ちた顔でいた。どうやら嘘ではないらしい。

「ま、それで反乱さ。人間の間でもよくあることだろ？　ストライキとか、日本じゃ、昔の下克上とかね。それと同じものだよ。ただし規模というレベルが違うけどね」

「それじゃ、お前がリーダーなのか？」

「いや、違うよ。僕だって幹部クラスになるのが精一杯。上はいるよ。僕たち悪魔の考えをわかつてくれる『お方』がね」

無意識だろうが「悪魔」という部分に強さがあつた気がした。

「それで真咲は自分を裏切つた僕たちに復讐をしようつてわけだよ。ここは本人から聞いていたかな？」

「そんなことはどうでもいいわ。それより、今回の黒幕は誰？」

真咲の言葉にシェイドは微笑した。

「さて、ね。言えることは、黒幕は僕たちの側じゃなによ

「どういうこと？」

「……ああ、そうだ。君はまだ眠りから覚めたばかりだつたね。十一年も寝ていたなんて、それで僕が『執行官』になつたのも知らないわけだ」

シェイドは合点がいったように頷く。

「なに？」

「『執行官』だよ『執行官』。離反したのを

「どういうことだ？」

翼が真意を量り兼ね、真咲に訊ねる。

「こいつは……また仲間を売つたのよ。『執行官』っていうのは聖

警察と同等の力を持つ滅魔機関の一つの、簡単に言えば役職名よ

「つまり、悪魔の敵？」

「それも簡単に言えばね」

真咲が説明している間にもショイドは微笑を絶やさず、一人を見ていた。

「説明終わった？」

「ああ。納得したぜ」

「そう、ならこちらとしても仕事があるからね。《第一級魔埋葬機関第十七支部》から拘束又は逮捕状が出ている。おとなしく捕まつてくれるとありがたいけど……」

「却下よ。前にも白河のを断つたことぐらい知つてるでしょ？」

ショイドは一瞬考えるような素振りを見せ、

「……ああ、白河。聖警察の。まったくあんな恥ずかしい名前の組織にいるなんてね。」つちとしては意外だったよ。所詮警察なんて弱小組織だからね

「翼、下がつてて」

「はいはい」

すでに人外の戦いには関われないと納得済みの翼はそそくさと物陰に隠れる。

「「J」たちとしてはもちろん抵抗するわよ。あなたをもう一度殺してもね」

「やれるものなら……」

「消える」

そう言い切る前に真咲は跳んでいた。  
しゅっという風を切る音。

り、りりーりん。

今度の鈴の音は乱れ鳴いた。

シェイドも跳んだのだ。屋上の縁に腰をかけた状態から一気に。  
彼が今までいた場所に魔力を溜め込んだ真咲の拳がめり込む。

「ホントに外見じゃねえな」

翼は人外の戦闘に物陰に隠れつつも身をかがめる。

シェイドは座っていた場所から屋上の貯水タンクの上まで跳んでいた。手には長い棒が握られている。否、棒の先端には三日月型の刃がある。鎌だ。死神が持っている、イメージ通りの巨大な鎌。ただその刃はどす黒く、光も反射しない。刃と柄の境目にも金色の鈴がついている。

り、りり、りいーん

耳のものと音が二重奏を奏でる。

「まったく、相変わらずのバカ力だね」

「一トを翻し、シェイドはタンクから飛び降りる。音もなく着地。

「あなたに言われたくないわね」

真咲は両手をシェイドに向けて差し出した。手の周りが輝き、左手、右手の順に自動拳銃が顕現する。

「「J」の距離で当たるかな？」

「その目で確かめたら？」

ダウウウウン！

音速を超える弾丸。一マガジン分使い切るほどに連射した。もと真咲の使う銃の弾に制限があるのかすら謎であるが。

ショイドは大鎌を振るうと弾丸を弾き落とす。

その高速の戦闘で翼がからうじて見えたのがショイドの口の笑みと取れる歪みだった。

「あはははははは……」

ついに声まで上げて笑い出した。

「変わつてないよ。口より手が先つてやつかい？」

茶化すよつな調子でそう言つショイドに真咲は言い返す。

「性分なの」

さりに真咲は銃を捨てると、片刃の剣を出す。

接近。上段から振り下ろされる刃をショイドは軽々と受けとめる。あまつさえ弾き返した。

「なつ……！」

「甘い

「ショイドが鎌を一閃する。白刃がきらめいた。

「シツ……つ

真咲は回避したように見えたが、制服の腹のあたりが切れていた隙間から白い肌が見える。

「へえ……」

それにただただ感嘆したような声を漏らすショイド。その表情には余裕すら垣間見える。微かに浮かぶ笑み。

「どうしたの？ それで終わり？」

真咲のさらに挑発するような発言。今は自分よりも頭一つ高い位置にある相手に上目遣いの視線を向ける。鋭い一瞥を。

「いやいや……まだまだよ？…………はあー！」

「

ン……

それは 大鎌は、ショイドに投げられた。大きく回転し、真咲に迫る。遠心力で加速した刃は空を切り裂く。

「そんな大振りな攻撃ツ！」

真咲はCG映画よろしく上体を反らし、避ける。

が。

「う おおおおおおおおおお？」

避けられた鎌は隠れていた翼の頭ぎりぎりを通りすぎた。風圧で髪がさらさらと揺れる。

「あ

「『あ』、じゃねえ！」

アホ毛を五、六本ぱつさりと切られた翼は涙目で怒鳴る。怒鳴る  
ぐらいで済むような」とではないのだが。

驚いた拍子に腰を抜かしていたことに気づいた翼は立ち上がりつ  
と手をついた。

ぬちや  
……

「え？」

手を見る。

黒いものがべつたりとついていた。

「ンだ、これ？」

鼻を寄せて、

「これって

前にも、しかもつい先ほど嗅いだ匂い。生暖かく生臭い、それで  
いて無機物の鉄が含まれたかのような……

それは……

血だつた。

「血……って俺のじゃないよな」あわてて自分の着ていたものを確かめる。と。ズボンにもべつとりとついていた。

なぜ?

「…………そういうことがよ…………」

なぜ足元がおかしかったのか、真咲が見ないほうがいいと言つたのか。すべてわかつた。ここは血の海だ。よく見れば服の切れ端やなにやら赤黒い塊が落ちている。

「ぐ…………うつ…………」

どこからか声がした。

ふと目をやると貯水タンクの陰に倒れた人がいることに気づく。白い服。白河がつれていた、聖警察の隊員だろうか。

「お…………お前」

全身ぼろぼろだった。血に塗れている。乾き、赤黒くなつたものが顔につき、どこか不気味ですらあつた。

「助け…………」

男が手を伸ばす。だが、

「…………なんだ。まだそこにいたんだ」

冷たい声が男の頭上から降る。

「せつから助けておいたのに。君には言つたよ? 僕のことを本部に報告しなつて」

微笑を浮かべた口が不気味に歪む。童顔だからなのか、目は無邪氣であったが、その見え方はときと場合による。今は違う。

「命を無駄にするなども言つたよね? 他の人たちみんな死んだのに。ああ、それとも助かりたくない?」

ショイドは虚空から取り出した鎌を男の首に向けた。翼は、

「お…………」

「あ？」

言葉が続かなかつた。

ショイドの殺氣のこもつた眼を向けられたからだ。金色の瞳。光のない。

がちがちと歯が噛み合はず震えているのがわかる。手足は震え、立ち上がるこすら叶わない。

「まったく、今日はほとほとまらない日だ。興がそがれた。帰るよ、今日はね。真咲もまだ弱いみたいだし、ほら」

彼が指差す先にはフェンスにもたれかかつた真咲がいた。明かに消耗している。

「ぜえ……っつ

漏れる息を抑えたつもりだろうが、遠田に見ている翼にもそれははつきりと聞こえた。ショイドには……言つまでもない。

翼が血に見入つてゐるほとんど一瞬の間に真咲はやられた。今ではフェンスに身を預けて立つてゐるのがやつとだ。服のあちこちが裂けていたし、露出した肌からは鮮血が滴つてゐる。

「なにをした……ショイドっ

「なにも。ただちょっと時間がなくなりそなんでね、急がせてもらつたよ」

そして男を見下ろすと、

「さて、君もそんなに死にたいのなら、今この場で殺すよ？」  
ぎりっと男が歯を食い縛るのが見えた。その口が嘲笑に変わるもの。

ウウウウウウン！

男が咄嗟に、おそれく最後の気力を振り絞り放つた弾丸はいとも簡単に避けられた。

「はい、これで最後」

ショイドは鎌を引く。

男の首は音もなく体から分離させられた。やけに重たそうな音を立てて血の海に落ちる。

「…………任務完了。優先順位の変更」

なにやらつぶやくと、ショイドは翼の方に向き直った。

「今日はもう終わりだ。真咲にはこれ以上弱くならぬよう言つておいで」

「…………、全員お前が？」

屋上に溜まる血に浮かぶ肉片を指差し、翼は問う。

「そうだけど？」

きょとんとした顔で訊き返すショイド。

「べつにいいじゃないの？ だつてこいつらは君たちの命を狙つていたわけだし。君だつて大切な人とか自分が殺されそうだったら、相手を殺すのは当たり前でしょ？ ただ僕はそのサポートをしただけだよ？」

目の前で一つの命を奪い、今は助けたと言つ。

「ふざけんな！ こつちは誰の命も奪つちゃいねえんだよ！ それは手前勝手な理由だろうが！」

所詮、結果論であるとわかつていても、思わず言葉に力がこもつてしまつた。

「へえ、君もそこまで言えるんだ。まあ当たり前か。じゃあさ、真

咲に訊いてみなよ。彼女だつてたくさん、それはもう僕とは桁が違  
うほどに人間と悪魔を殺したよ？ さも当たり前みたいにね。それ  
でも『こつちは』なんて言える？ たぶん今言つた『こつち』には  
真咲のことも含まれていたと思つけど、誰も殺していなのは君だけ  
だよ、翼。君の隣にいるのは非道な悪魔さ」

真咲の手が翼の肩にかかつていった。

「帰れ、さも……ないと今度は本氣で殺、……すわよ？」

切れ切れの呼吸で真咲が言う。

「真実でしょ？ そんな相手でも協力できる？ 翼」

翼は言葉に詰まつた。

自分が迂闊だつた。つい頭に来て言い返してしまつたが、逆にこ  
ちらが丸め込まれてしまつ。そして真咲との間に流れれる嫌な空気。  
桁が違う？

人間、悪魔がまわす？

それが、真実？

「ま、いいよ。翼、君がこちらに協力してくれるならね」「  
なに？」

ショイドの口から出たのは意外な言葉だつた。

つまり、本当の狙いは俺？

翼はそう思つた。初めから、真咲を捕獲することではなく。  
「いきなりつて言つても無理か。今のままじゃ。そうだな……」  
ショイドはしばらく顎に手を当て考へると、手を開いて突き出す。

「五日間、あげるよ。真咲から話を聞いて考えるといい。こちらに協力するか、警察に身を託すか、真咲と死ぬか。まあ、選択肢はいろいろある。ただどれも全部、君が決めることだ。きっと結構長いよ、この五日間は……」

翼はシェイドの視線を真っ向から受けた。

自分について来なければ殺す、そう言いたいのだろう。おそらく今挙げられた三つの中で一番翼が生き残れる確立が高いのは、シェイドに協力することだ。

そんなことは分かり切っている……分かり切っているのだ。

「わかった。五日間だな？」

あくまで淡々と言い返した。

「そう。いい返事を期待しているよ」

一言言い残すと、シェイドは跳躍した。その姿が夜空の闇に溶けるようにして消える。

「…………ッ？」

見送るようすに空を見上げていると、翼は胸倉を掴まれた。視線を掴んだ彼女の方へと向ける。

「なんで返事をしたッ！ あと少し時間を稼げば私がなんとかしていたのにッ！」

真咲の真っ赤な目は怒りでいっぱいだった。

だがそんな彼女に返ってきたのは翼の冷ややかな視線。

「それで、か？」

翼は血の滴る真咲の左腕を見下ろす。見るからに痛々しい傷だつた。制服が真っ赤に染まっている。左腕だけでなく全身に切り傷が見られる。そこから溢れた血が微かにでも赤く、彼女の身を染めていた。

「あなた、私をなめているの？ 人間とは治癒能力が違うわ。この程度……」

「治るってか？ 無理だろ？ 少しは自分のことぐらい自分でわかれ！ 現に今だって息上がりってるし、血は流れてるし！」怒鳴り返した。ほとんど反射的に。今まで溜め込んできたものをすべて。

いきなりの大声に真咲はびくつと体を震わせた。

「つたく……さつきから聞いてりや、悪魔つてのは随分と手前エの講釈たれんのが好きらしいな？ 長いんだよ、話が。長すぎて理解できやしねえ。ふざけやがつて、くそが！ あと少しだ？ どこからその自信が湧くんだ？ あ？ ぼろぼろじやねえかよ。まだ弱いんだろ？ なのに、なんで無理したがるんだ、手前えは！」

翼は今日この十数分の間に起きたこと すべてわけのわからなすことだつた の混乱を吐き出すように言葉を続けた。

「そもそもなんなんだよ。お前が殺そうとしているやつは？ いい加減はつきりしろよ！ 」 つちは全部わけがわからねえんだよ！ 死神とか言つのは出てくるし、見た目ガキのクセに人に説教か？ ふざけてる。今度あつたらぜつて一泣かす。ああ！ 泣かしますとも。あのクソ生意氣なツラ一発殴つたる。なにが、命がどーのこーのだ。俺の知つたことかよ！ ああ！ もう混乱して来た。だいたい人に説教たれんのも苦手なんだぞ、俺。無駄に話させんな！」 ほとんど自暴自棄でこつちこそわけのわからないことを散々言つた拳句、自爆した。

（あ～、くそ！ これじゃなに言いたいのか訳わからねえよ）

翼は頭をかきむしつた。金髪が彼の心を反映させたかのように乱れる。

「……だつたら……だつたら、どうすればいいのよ……そもそも私が弱いせいじやない、全部……私がどうにかしなきやいけないのに。これじやあ何にもできないじやない……」

そんな翼に対し、真咲は泣いていた。

普段の（人間で見れば）大人っぽい雰囲気が嘘のような顔。真紅だつた瞳は黒いそれに戻っている。

ほとんど翼は、自分の言っていることが理解できてはないだ  
ろうと思っていた。けれど、真咲は理解していた。それに対する返  
答だった。

それを聞きどこか頭がすつきりとなつたように感じる。

「ああ、確かにお前は弱い。あのガキに比べればな。でも、それは  
『今』だろ？ 前は倒したんだろ？ でも今は力が戻つてない。だ  
から俺に協力したんだろ？」

「こくり、と頷く真咲。

「なら頼れ」

「え？」

「それじゃ、梓と一緒にだ。俺に頼れ、少しぐらいは。一人で抱え込  
むなつて、梓にも言つたばつかだろ？ これも理解しろ」

頼る……今まで一人だったのだろうか？ そうなのだろう。

真咲は自問自答をする。

そうでなければ、こんな感情にはならない。  
彼の言葉に……こんな気持ちには……

「…………うん」

真咲はしつかりと、はっきりと頷いた。目元を拭う。  
翼は笑みを浮かべると、

「さて、そろそろ下りないと、梓も待つてはいるだろ？」

「あ、死体の記憶は消した方がいいかな……それとこの後始末…  
は警察がやるわね。それぐらいはしてもらわないと……」

「記憶は……あいつが気にしているようならそうした方がいいだろ  
うな」

「そつか……」

歩き出そうとして、よひり、と真咲は翼にもたれかかった。

「あ、あれ？」

「おい、なんだよ、真咲」

「ゴメン、足に力入らなくて」

「つたぐ……」

翼は、さもじょうがなさそうな顔をして真咲に肩を貸した。

「ごめん……」

「いいんだ。言つたばつかりだ。頼れつて」

真咲は微笑した。

彼なら……翼なら……

## 第一章「黄金の鎌・漆黒の鎌」・24（前書き）

第一章最終話です。果たして、シハイドの裏に潜む黒幕とは……？

その二人を見ている人影が一つ。

ショイドだ。

反対側のビルの屋上から見下ろしていた。

「…………どうやら、協力は望めない…………か。期限が来たら殺す？」

彼は背後の闇に問う。何もない、どこまでも続いていそうな闇に。

『それはお前の好きにしろ。あいつはいらん。他のやつを見つけた

……』

ぐぐもつた声が帰ってきた。まるで機械で声を変えたような声だ。

「？……ああ、彼女」

そう言い先ほどまでいたビルの入り口にショイドは田を向ける。

『ククク……この日本という国は素晴らしいな。あそこまでの逸材がこれほど近くにいるとは』

「…………そうですね。それで、いつに？」

『期限切れと同時だ。傷一つつけるな。まあ、お前が可能なら両方とも確保してもいいかもな。予備がいればその分、楽だ』

「御意」

ぐぐもつた声の主の気配が消えた。

「…………翼、もう後悔しても遅いよ。でも仕方ないね、それは君が決めた道なんだから。この五日間は人間として君がすこすことのできる最後の五日間だ。せいぜい楽しむといいね。そして不運な少女。いや、幸運の『神の御子』とでも言うのかな？」

ショイドの視線の先には、ビルから出て来た真咲と翼と会流する少女の姿があつた。

『翼と居合わせてしまつたこと……そして天城真咲の傍にいてしまつたこと、知つてしまつたこと。これはすべて運命だ。だから、その先に何が待つてしようともしつかり受け止めてもらひよ？』

倉本梓。

それが彼女の名前。

おそらく、今この世界で最も幸運でいて、一番不運に近い人間。

## 第三章「独りの騎士・孤独の姫」・1（前書き）

第三章の開幕です。ショイードとの戦いに決着がつきました。果たして翼と真咲、そして梓の向かう先とは？

第三章「独りの騎士・孤独の姫」

それは遠い昔の話。

満月が漆黒の空に光り、星々が煌いていた。  
月の明かりに照らし出されたのは二つの影。

彼は小さな少年だった。小学校にも通い出したぐらいの年頃だろ  
う。  
少年の前には黒い影があった。人に似た形をしているが人ではな  
い。

そしてそれは彼から見ればとても大きな影だ。

本当に真っ黒で、影から伸びる本物の影より黒く、深かつた。  
影は少年の前で片膝をつくようにしてかがみこんでいる。その頭  
はちょうど少年の視線上にある。

少年が手を伸ばすと影は顔を上げた。月光が照らした顔は端整な  
顔立ちの女性のものだった。月明かりのせいか、それとも体調が悪  
いのか、顔は白く、髪が長く、夜風に揺れている。

女は少年の手を拒むように顔をそむけた。

だが、少年は自分の手を彼女の額に当てる。途端に少年の手から  
光の粒子が溢れ出る。まるで闇夜に飛び交う螢のようなそれは女の  
額から体全体に広がり、取り巻いた。徐々に光は薄く、拡散してい  
つた。

戸惑う女を尻目に少年は微笑みを浮かべた。

女の顔にも自然と笑みが浮かぶ。ゆっくりと立ち上ると、その  
背中にある羽が大きく開いた。漆黒の羽だ。羽がはらり、はらりと  
舞う。

羽に見入るようにして少年が目を輝かせていた。

黒翼は大きく一度羽ばたいた。地面に生える草がその風圧で倒れ、  
強風が巻き起こる。

女の体が少しづつ浮かび上がる。

「  
」

女の口が開かれ、人外の言葉が紡がれた。

今度は少年の首に光が溢れた。光はネックレスのような形を形成する。

少年はそれに触れると、空を見上げた。

そこには何もなかつた。

見上げる限りの星空。

いつの間にか顔を出した月。

光を放つものは星と月以外なく、少年の立つ場所は闇だった。

見上げる限りの闇。

どこまでも続く、無限。

手を伸ばせば届きそうな、無限。

結局、梓の記憶を消さなかつた。

正しくは彼女から言い出した。

別段気になった様子もなかつたのだが、それは表面上だけで、心のどこかでは先日のできごとが残つているはずなのだ。

それでも彼女はいいと言つた。

普通ならあの惨殺と呼べる死体を見た時点で気が狂いそうになつても仕方のないはずなのに、彼女は普段通りであつた。そこで改めて彼女の強さを感じたりもした。例えそれが上辺だけの無理をしている結果だとしても。

それにショイドの件で真咲との信頼は深まつた、気がする。

正直、怒鳴り散らしただけだが、どうやら彼女なりに解釈して、納得してくれたらしい。これで少しは彼女の言つ契約者らしくなつただろうか？

あと、今日は寮から電気代の請求があつた。

なぜかうちの寮は電気・ガス・水道は自腹なのだ。ほとんど寮じゃないという生徒が多い。まあ、べつに大してかかるというわけでもないのだが。バイトも許可制で認めているわけなので。ある意味社会の厳しさというものを教えてくれる。

それと、まだ肉が食えない。

よく考えたらあれほどの死体（ほとんど原型がなかつたが）を見たのだから、あの時点で吐いていてもおかしくなかつた。なんで俺は平然としていられたのだろう。思い出しだけでも気持ち悪くなるというのに。梓も同じはずなんだが。

ま、そんなわけであれからだいぶ時間が経つていた。

真咲はすっかりクラスに馴染み 頭染むどころかアイドル的存在で、速攻でファンクラブが結成されたらしい 先日のことが嘘

のようだ。

前に、真咲の転校初日以来、警察から彼女を逮捕しに来ることはなく、平穀そのものだった。

でも、期限が迫っていることは確かだ。

そう思つたのは、翼と真咲が下校しているときだった。

「期限、明日でしょ？」

不意に真咲からそう訊かれたのが最初だつた。

「ん、ああ」

「どうするの？」

「どうするもこうするも、俺はあいつには協力しない」

「そういうことじやなくて。具体的に」

「うーん。何も考えてないんだよな」

真咲はがっくりと肩を落とし、

「それで大丈夫なの？」

「？」

翼は疑問符を浮かべると、

「なんでだ？ こっちには真咲がいるだろ？」

「な

照れたように顔を朱に染める真咲。少し不意打ち気味だつただろうか、と考える。

ま、こいつに不意打ちすると心なしか気分がいい。会つてからずつと驚かされっぱなしだつたからだろう。

「あなた頭おかしくなつた？」

「おい。どういう言いがかりだ、『ハ』」

「いや、翼のキャラが違つて見えたから」

「なんだ、それ」

真咲の言葉を翼は鼻で笑つて受け流した。

夕日が傾いていた。空を橙色に染め、天頂付近は赤紫色がかかつている。

二人が歩いている道は普段から人通りが少ない下校路で、今もそ

れは同じだった。

「そういうや、今日、梓休みだつたな」

「やうね」

「……めずらしこ」となんだ、あいつが休むなんて

「心配？」

真咲は意地悪そうな目をした。「うにうにだけは梓や他の仲のよい知り合いの女子と変わらない。実際年齢から考えると、むしろガキっぽい。そもそも何故そんな顔をするのか。そこが理解できないところでもある。

「ん~多少はな」

「多少?」

「そう、多・少」

言い切る。

「なら、お見舞いでも行こうか?」

いいところで切り出す、と翼は思った。

彼もどこかでは思つていたのか、いつの間にか梓の家に行く方の道を歩いていたりする。

「ほら、翼もそうしたかつたんでしょ?」

随分と痛いところを突く。無意識とはいえる。

翼は観念したように頭をかいた。

「ああ、わかつたよ。ちょうど、偶然にも、梓の家に近いからな」

「偶然?」

「そう、偶・然」

断固として言い張る翼だった。

それと同じ頃……

彼自身、ここに来るのははじめてではなかつた。だがいつにない緊張感が彼から発せられていたことも事実だつた。

「シルフィード……」

「はい」

彼女は、白河の隣に控えていた。今回は音もなく現れるのではなく、しつかりと最初から隣にいた。一人の着ているものは白を基調とした聖警察の制服である。ただ白河はいつものコートを着ていな

い。

「今回ばかりは、お前に頼ります」

「了解しています」

シルフィードは静かに頷いた。長い髪が肩を滑る。

私は……彼を守る。それが私の存在意義であり、一番の願いだ。白河大輔。自らの契約者であり、彼を幼少より知る者は私だけ。どこか独占的な感情があるのだろう、自覚している。

しかし、それでいいのだ。

それが私を強くする。彼を守る力を与える。より強固なものへと。断固としたものへと。

「……必ずお守りいたします」

小さくつぶやいた。それは横にいる白河の耳にすら届かない。それでもかまわない。互いに求めているものは違うのだから。それ違うようだつたら、いつそ知らない方がいいのだ。たとえそれが心に秘めた想いだとしても。

彼ら二人が真咲と翼を追跡できなかつた理由はあることを調べていたからだ。それも、この先彼らにとつても、また人間にとつても重要なこと。

「……行きます」

白河は田の前にある木製のドアをノックする。じつじつじつとは  
ない。ただそれだけだ。

「誰だ？」

中からはどこか高圧的な口調がした。

「白河です」

「……そうか、入れ」

難なく許可は出た。問題はこれからだ。

室内には接客用のソファ、机、それにいくつも分厚い本が収まつた本棚、それと部屋の主が座る机。

その机には、一人の男がいた。厳格さを漂わせる口髭とその眼光。幾重にも刻まれた皺。ダークグレーの頭髪。歳は若く見積もつて五十代だろうか。

陣内秋義。じんない・あきよし 白河たち聖警察の直接的な上官で、対魔作戦執行課のトップである。

「どうした？ 白河。またあの悪魔の報告か？」

「いえ、今回は別件です」

ぴくり、と陣内の眉間に皺が寄つた。

「ほう……それはどんな？」

わざと挑発するような視線で、白河を睨み見る。

何かわかつっていたとしても、自分が直接的に言つまでは惚けるつもりだらう。そういう男なのだ、彼は。

白河は上面の視線に臆することなく言い放つた。

「こちらの書類に見覚えは？」

「なるほど……では、こちらは？」

「……これは……お前、これをどこから？」

ニヤリと白河が不敵な笑みを浮かべる。

「さて、どこからでしううね？ まだありますよ、これ……そうそう、こちらもですね。さらに……これは決定的でしうう

次々に机の上に散乱する書類。

それはどれもこれもグラフが書かれていたり、文字の羅列がやら多かつたりと統一感のないものばかりだったが、すべて表題は一致していた。

『魔的複製体についての理論』

シルフィードから渡された書類を、陣内の座る机に置く。置く、  
と言つよりかはぱら撒くと言つた方が正しいかも知れない。

「……いや、ないが？」

ぱりぱりと紙片をめくつ、内容はおそれくそれほど見ていないで  
あらうが、陣内は答えた。

「何をなさるおつもりですか？　課長？」

「ふん……」この程度の書類がここにあつてはいけないのか？」  
まるで開き直ったかのような口調。

確かに『魔』に関する書類は、この聖警察本部にはいくらでもある。それは表向きにしていいものも、裏で隠しておかなければならぬものも含めてだ。

「いえ、そのようには言つていませんよ。ただこれを持っていた人間によります」

白河は上着の胸ポケットから写真を取り出した。

「この方、ご存知ですね？」

「…………」

写真には頭の禿げた鼻眼鏡の男が写っていた。明かに医者や研究員が着ているとわかる白い白衣も写っていた。隠し撮りをしたらしく、彼の視線はカメラとは別の方に向いている。

白河の言葉に対し、陣内は黙り続けた。

「知らないとは言わせませんよ。彼は『魔術複製及び複体化』の権威だそうじゃないですか。まあ、私も知りませんでしたけどね。そんな論理が存在したことを。ちょっと問い合わせたら、小鳥みたいに鳴きだしましたよ。所詮、その程度の男に任せたのがあなたの運のつきつてやつですね」

小さく肩をすくめてみせる。

「彼も今日ここに来る予定だったのですが、迎えに行つた部下の報告によると、何者かに殺害されていたようです。それも人間以外の何かに。もう一度訊きます。この理論で何をなさるおつもりですか？」

？」

白河は半眼で陣内を見る。

部屋は、窓にブラインドがかかっているため薄暗く、彼の表情も

どこか脅迫じみたものに見えた。ただ、陣内は口を開く様子すらない。

「おかしいとは思っていたんですよ。突然、魔魂について調べるなどと言われたときから。確かに情報の少ないものではありますが、何故、今急遽必要になつたのか？ それはあなた自身が必要だつたからなんですね？ この『魔的複製体』を作るために」

「く…………ふ…………ふ…………ははははは…………！」

「…………？」

まるで半狂乱になつたように、突如として笑い出す陣内。

普段は表情を崩さないシルフィードまでもが訝しげな顔をした。

「くはははははー！」

「…………ー シルフィードー！」

白河が叫ぶと同時に陣内は動いた。

陣内は机から、机の一番上の引き出しがら小瓶を取り出した。それを口に運ぶ。中身は薄い緑色の液体で、容量にすると五リットルもないだろう。

途中で命を受けたシルフィードが弾き飛ばそうとするが、それより早く躊躇する。

「何を？」

一人が見る中、陣内は……笑つた。声を上げずに、不気味に。

「…………！」

シルフィードが動揺しているのがわかつた。現に彼女は自らの背中を冷たい汗が落ちるのがわかつた。

それは陣内からの魔力が膨れ上がつてゐるせいだ。彼の姿にさらに一回りも三回りも巨大な影がかぶつて見えた。あまりにも巨大な『それ』は部屋の壁を覆うように進む。

膨大に膨れ上がる魔力。

「い、これは……」

「白河様、危険です」

「でしううね……ただ、退かせてももらえそうにないですが

「GUUUUUUUUUUUUUUUUUUUUUUUU！」

その声はすでに人間のものではなくなっていた。

「声と言つか、唸りですね」

白河はつぶやくと、腰のホルスターから自動拳銃を引き抜く。中の弾丸は対魔用の特性炸薬だ。完全に効くとは思わないが、使わないよりははるかにましだろう。

「……来ます」

「GUWEEEEEEEEEEEEE！」

人間とは思えない跳躍力で陣内が迫る。

ギィイイイイイイツギィイツギィイイイイイインツ！

計三発の滅魔性の弾丸が拳銃から吐き出される。

「ち！ ハズレですか！」

弾丸はすべて回避された。どれもありえない、重力というものを無視した回避の仕方ではあつたが、すでに相手は人間ではない。その体捌きは人間の範疇を越えていた。

さらに陣内は空中で体勢を変え、突進を試みる。

「

シルフィードは長く術式を唱えた。

顯現するは物体ではなく、風そのもの。

机上に散らばった書類を巻き上げ、白河と自らの前に風壁を作る。陣内の突進は不可視の風の壁に防がれた。

「この距離ではどうですか？」

白河が拳銃をほとんど零距離で放つ。

「ぐえ……」

間の抜けた声を上げ吹き飛ぶ陣内。彼の体は壁に衝突し、ずり落ちる。

「なんか……間が抜けてますね」

ホルスターに銃をしまう。

しかし、シルフィードは緊張の糸を緩めなかつた。

「どうしました？」

それによつて再び警戒する白河。

「まだです」

ぐつたりと倒れていた陣内が、まるで操り人形のように起き上がる。口元には笑みすらあつた。氣色悪いことこの上ない。

「ゾンビですか……」

白河はため息とともにそんな言葉を漏らした。

収めた銃を再び構える。

「これで終わりにしますよ?」

「了解です」

「く……ははは」

陣内はようやく、液体を口にしてからはじめて人間らしい声を上げた。

「終ワリだ。お前タチハ」

片言としか取れない、たどたどしい言葉。そこに入間らしさは微塵も感じられない。

「おや? 人間としての感覚が残つてましたか?」

白河が挑発的な視線を陣内 だつたもの に向ける。

「アノ方がクル……フ、ふ、H A H A H A H A !」

陣内は両手を挙げて狂つた笑いを上げる。

「……！ 白河様！」

シルフィードが驚きに目を見開かせて、白河に飛びつく。爆発的に膨れ上がつた魔力が一人を襲つたのは次の瞬間だつた。

「な！ シルフィード！」

「くうううううううつ！」

魔力の元は陣内。彼の体は異様な形に膨れ上がつた。顔はぶくぶくといびつに膨らみ、手の関節でない部分が曲がり爆散した。

室内だけに爆発の勢いは收まらず、建物の一角をまるいと吹き飛ばした。

「……ん？」

「どうした、真咲？」

真咲はどこか、遠くを見るような目をしていた。

「いや……何でもない……と思つ」

梓の家はもうすぐ目の前だった。

立派な家で、門もある。敷地は市内でも屈指の広さを誇る。純和風の建物で白い壁が左右に伸びていた。門は大きなものと、その横に通用の小さなものがある。

翼は通用門の前まで行くと、この場とはミスマッチなインター ホンを押した。

『はい？』

しばらくして返答がある。

どこか低い相手を威圧するような声色だった。

それも仕方ないと言えば仕方ない。

理由は

「あの梓さんに会いたいんですけど……」

『は？ お嬢になんの用ですかい？』

「お、お嬢？」

その言葉の意味することがいまいちわからなかつたのだろう。真咲はきょとんとした顔をしている。

「ああ、梓んちは『倉本組』つていつ……」

翼は小声で真咲に説明をする。

梓の家はこのあたりでは多少有名な組の頭を勤めている。初めて彼女の家に行つたときは翼も驚いたものだ。なにせ、いかつい顔した『お兄さん』がたくさんいるわけだから。

「なるほどね……そういうことだったの」

「そゆこと。まあなんの心配もいらないが……」

『おい、何の用だつて訊いてんだがな?』

しびれを切らしたような声がインター ホンから聞こえた。

「あ、すみません、翼なんですが……」

『え? あ、翼さんでしたか……これはすみません。今お通じします』

急に腰の低い物言いになる相手。

よく口調が変わる相手だと真咲は思った。

「よ

「元気？」

入室早々一人はそう言った。

梓は部屋に敷かれたふとんで横になっていた。心なしか顔色は普段より悪そうであったが、

「あ、二人ともどうしたの？」

驚いた表情で起き上るとこりを見ると、それほどでもないようだ。まあ、彼女のことだから無理をしているのかも知れないが、と翼は思った。

「それはこっちの台詞だ。お前が休むなんてめずらしいからな」

翼は部屋の隅にまとめられていた座布団を引っ張つて来ると、それに座つた。真咲の分もちゃつかり確保している。

「うん、ちょっとね、風邪引じらせちゃつたみたいで……」

梓は微苦笑して答えた。

「そうか……和貴は来たのか？」

「うん。今日は午後になつたらすぐ来たよ」

「ああ、そういうや……」

翼は新明が学校を早退したことを思い出した。

「こういう理由だったのか。

「あいつ、意外と抜け目ないな……」

「そうだね。昔から……」

梓はどこか遠い目をして、そつそつぶやいた。

「お嬢、よろしいですか？」

インター ホンの男 確か名前はケンとかいう ドア越しに聞こえた。

「はい？」

「頭が、翼さんをお呼びです」

「お父さんが？」

「はい。では確かに伝えました」

「ドアの向こうの氣配が消えた」

梓は「何で？」という顔で翼を見る。

翼は翼で、さっぱりという表情で首を振る。特に呼ばれる理由などないはずだが？

「とりあえず、行つた方がいいな」

「えつと、お父さんの部屋は……」

「いい、知ってるから」

手を挙げて答える。

翼が出ると、残った二人の間に沈黙が漂った。

「えつと……梓。あなたの家つて翼の言つてた通り……」

「ええ、ちょっとした『組』ね。もう古いつてお父さんには言つてるんだけど……」

梓は微苦笑してみせた。

再び沈黙……

「……あのせ、真咲……真咲つてその……」

妙にどもつた調子になつてしまつ梓に、真咲は彼女が何を聞いたいのかを悟つた。

「……翼から聞いた?」

「うん……あの日の夜に、電話があつた」

真咲はそこでため息を一つつくりと、座り方を崩し、あぐらをかいだ。

記憶を消すかどうか訊くときには、彼女の反応が気になつてはいたのだが、おそらく電話で聞いたとは言つても、梓の求めたことなのだろう。

「そつか……」

髪をかき上げ、観念したような口調で言葉を続けた。

「どこまで聞いた?」

「とりあえず……悪魔つてこと」

「そう。じゃあ、もう少し深く話そつか?」

梓はこくりと頷いた。

「……悪魔ね。私の場合、正しくは墮天使。名前ぐらいはどういう意味かわかるでしよう? 何で墮天使かつて言つと、最初のルシファーと同じ、私も『同族殺し』だから」

『同族殺し』という言葉に、真咲は目を細めた。自分でも思い出しがくない記憶。咎人として生きる道を選んだ……選ばざるを得なか

つた過去。仲間を殺したとしても、護りたいものがあった。だが、  
護れなかつた。結果が今ではどうしようもない。

梓は真剣な表情で続く言葉を待つてゐる。

「もともと反逆者であつたルシファーの末裔にして、『同族殺し』  
……それが私なの。天城真咲つていうのは、私がこの世界に来たと  
きの……」

語尾になるにつれ、小さくなつていいく声。

「真咲？」

訝しげに梓は表情を歪める。真咲が何を言おうとしているのか、考えているようでもある。

「私がこの世界に来たとき、最初に会った人間の名前……そして、彼女の体が、これ」

そう言い、自らの胸に手を当てる。その手は微かに震えていた。

「え……？ それって……？」

「うん。私が目覚めて、この世界に来たときに体……つまりは実体を失っているの。それを助けてくれたのが、天城真咲で……もう一人、男の子もいたんだけど……」

そう、それは思い出したくない過去。

名前と体をくれた少女……

魔力をくれた少年……

彼女たちに助けられたからこそ、今の真咲がここにいるのだ。どちらもが封印してきた、押し殺すようにしてきた過去ではあるが。ただし……

「私の本当の名前は……」

彼女が口を再び開いたとき、続く言葉を梓は制した。

「いいよ。真咲は真咲。今は今でしかないんだから。過去とかは関係ないよ」

声は無理やり出しているように、震えていた。はつとして梓を見ると、大きな目の端に涙が溜まっているようだつた。薄く、光る。「もちろん、真咲の本当の名前とかも。ただね……私が思ったのは、真咲が悪魔だつて聞いて……どこか、真咲が遠くの存在じゃないのかつて思ったの。記憶を消すつて言われて断つた一番の理由も、それ。今の話も聞いて、またそう思いそうになっちゃつた……」

近くにいた真咲ですら聞き取れないほど小さな声。

「梓……？」

今度聞き返したのは真咲だった。

「実はね、私、女の子の友達って呼べる人少ないんだ……と言つか  
友達 자체が少ないの。こんな家だから、なんとなく他の子の家族か  
ら避けられてね……だから、真咲は私に一番近づいてくれた……そ  
んな、人　いや墮天使だつて　だつたの。だからこれ以上、離  
れないで……」

と、梓の手が真咲の膝に置かれた彼女の手に重なる。小さな暖か  
い手。優しい心の持ち主の手。

離れないで……

梓は、本当に心からそう思つていた。

家のこと隱すようになつたのは高校になつてからだつた。中学  
まで一緒にいた生徒が少なくなり、彼女としても気にしていたこと  
がなくなつていた。

けれど……

翼と新明だけは別だつた。

同じ中学から出た女友達や事情を知る人たち　自分が勝手にそ  
う思つていただけかもしないが　は明かに避けるようにしてい  
たのに。

なぜ？

それは今でもわからない。

聞こうと思ったことは一度ではないが、そうしてみたことはない。  
どうせ翼や和貴はあやふやにしてしまう……

でもきっとそれは、二人が本当に彼女のことを見ついているからな  
のだろう。

「梓……」

「ね？」

哀願するような目。

真咲は、いつも明るく振舞つてゐる彼女もこんな目をするのだ、

と思った。

意外といえば、意外だった。

いつも、彼女は覆っていたのだ。自らの本当の顔を。本当は脆く、崩れやすい本心を、笑顔とその明るいと言われる性格で上塗りして。無理して。

真咲は彼女の手をぎゅっと握り返した。はつとして梓が目を見開いた。

## 第三章「独りの騎士・孤独の姫」・1-4（前書き）

第三章も折り返し地点です。最後までおつきあこの迷宮をよみこへ  
お願いします。

「 我は汝を、いつ、どこで、どんな状況であれいつとも救うことを誓おう。脆く、か弱い姫君よ、我を欲するとき、盟約のもとに、我を呼び給え 」

真咲は小さく囁くと、梓の手を、その甲に唇を寄せた。

「えつ？」

一瞬のことに戸惑う梓。きよとん、とした表情を浮かべている。まるで騎士が王に忠誠を示すかのような仕草をしたからだ。それもどこか毅然とした姿勢で、だ。

ただそれは気休めなどではない。真咲の心からの盟約。契約なんでものじゃない。一つの大切な信頼関係の下に結ばれる約束のようなんだ。真咲もこうこうすることをすることは自分から見てもめずらしいことだった。それほど、梓にある意味で惚れ込んでいるということなのだろうか。内心真咲は苦笑していた。

「これで、私は梓といつも一緒に

につこうと笑うと真咲は手を離した。彼女の笑みに誘われ、梓も微笑む。

「ありがとう」

「どういたしまして」

どこか照れたようなはにかんだ笑みを浮かべる梓。

「でも何なの？ 盟約って」

「あ……まあ、いいじゃない、何でも」

曖昧に笑う真咲。

「……ふうん」

その反応に梓もあまり追求しようとせしなかった。

「……それについても翼遅いね」

ふと、壁にかけられた時計を見る。十分ほど時間が経っていた。

「そうね。そもそも呼び出すつてのもわからないけど」

「うふ。お父さんと翼、仲はこにけど……」  
「のせめずらしいかも……」

ダン！

家全体が振動する。

突然のことに梓の体がびくっと跳ねた。

衝撃があまりに強すぎて、意識を失っていたらしい。

目の前がゆらゆらと揺らめき、意識が朦朧とする。眉間に力を込め、なんとかしようとは思つが……

「なんともならないってか？　いや……」

翼はふらつく足に無理に力を入れ、立ち上がつた。視界は白い靄がかかつたようになつてゐる。

と、その中に人影が見えた……ような気がした。彼の足元の少し前。

「つて……頭つ……！」

倒れていたのはこの組の頭である梓の父親だ。

翼は彼にふらつく足取りで近付くと、しゃがみ込む。

「うう……翼君かい？」

彼はうめくような声でそうつぶやいた。額に血がついてゐる。しかもそれは止まつていない。今も頭部にできた裂傷から滴つてゐる。

「はい、大丈夫ですか、頭？」

「は……この程度なら若えうちに経験済みつてやつよお……」

言葉とは裏腹に声が弱くなつてゐる。このままではまづい、直感的に思つた翼は辺りを見回す。

一体何が起きたのか。それを理解する必要がある。まっさきにそれが考えついた。

「何が……つ……！」

部屋の一辺……縁側へと続く障子は吹き飛び、それがあつた場所には見たことのある姿があつた。

深い黒髪、光のない黄金の瞳。無限にも見えるその目の奥には、何かを楽しむ子どものような感情が宿つてゐる。

リリーン……

「やあ、翼」

冷ややかな声。そして、どこかスカした態度。翼に言わせればクソ生意氣の上ない。

「……シハイド」

先日対峙したことのある死神に悪々しげに言葉をぶつける。何故ここにいるのか。何をしに来たのか。そんなことは関係ない。ただとげとげしい感情。

「おお、怖い怖い。そんな目で見ないでよ。何、怒ってるの?」  
リリーエン……

ふざけるように首を傾げるとイヤリングになつていてる鈴が鳴つた。  
どこか愛らしい姿かもしれないが、翼にはそうは見えない。

「ここに何をしに来やがつた!」

怒気を込めた叫び。前回、シェイドに感じた恐怖が嘘のようだつた。怖くない。なぜだかはわからないが。

「君を捕らえに」

「な……」

バカな……期限は明日まで、と続けよつと動いた口は、次にシェイドの発した言葉によつて制された。

「って言うかと思った?」

悪戯っ子のような笑いを浮かべたシェイド。あまりにも無邪氣そくに笑う。それが翼にとつてはむかつく以外の何にもならない。

「じゃあ、何なんだよ。まだ期限前だろ?」

「そうトゲトゲしない。ちょっと手違いが起きてしまつてね……本来ならあと一日あるわけだけど……急がなきやいけないんだよ」  
す、と音もなくシェイドは翼に近づく。身長は翼よりも小さいにもかかわらず、見上げる視線は威圧的で上から見ているようだ。

「だからさ……退いて」

「何をするのか言つてもらわねえとな。俺以外に目的があんのかよ  
「ある」

自分以外……この家で彼に関係しているのは、翼と真咲だけのはずだ。真咲を捕えるということはない。そして俺でもない……となると。

「まさか」

「わかった? そう、僕たちが捕まえに来たのは

僕たち？

シェイドの背後に黒い影のよつた人の形をしたもののがどこからともなく現れる。

「倉本梓。彼女さ」

「何でだよ。何で梓なんだよ」

「……どうやら真咲も気づいてないみたいだけど……彼女からも魔力の反応がある。おそらく、彼女も所持者ってことさ。ただ覚醒が君よりも遅かったから発見が遅れたんだよ。君が僕たちへの協力を断るようなら彼女を連れて行く。……まあ、翼はどうやら僕たちに非協力的だからさ、もう彼女を連れて行こうかなってわけ」

そう言つて『いのちにもせらに』一歩、シェイドたちは家の中に入つて来る。

「随分、いきなりじやないのか？」

「……しょうがないんだよ。そもそも僕たちも尻尾が掴まれそうだからさ。それに結果がわかつてゐるなら早くした方がいいだろ？ 善は急げつてね。だから……」

すつとシェイドは目を細めた。

「退け」

「うつ！」

翼の体が何かに吹き飛ばされ、壁にかけてあつた掛け軸に衝突する。すぐ下にあつた花瓶が倒れ、中身を置にぶちまたた。

「くそ……」

人間の体には強すぎる衝撃で意識が暗い闇に引きずり込まれる。

「行くぞ。……上だ。お前たちで確保して來い」

背後にいた手下「その1」に声をかける。

なぜ自らで行かないのか。それは……

「『善は急げ』か……急がば回れって言葉もあるけれど……知つてた？」

シェイドたちのいる位置のちょうど反対側には廊下へと通じる障子があつた。爆風でぼろぼろになつていてそれを開け放ち、真咲はシェイドたちを睨む。

その手には一挺の自動拳銃。銃口は寸分も違つことなくシェイドの額に向けられている。

「…。通りたいなら私を倒して行きなさい」

「へえ……そんなこと言つむやつていいわけ?」

シェイドは薄笑いを浮かべながら、鎌を顕現させた。家中で振り回すには、その大きさはいささか不便にも思える。

「……守らなければならぬのよ。彼女はね」

例え相手の方が強かつたとしても、絶対に退くわけにはいかない。勝ち目がなかつたとしても、それは変わらない。そもそも勝ち目など……

「…………君にしては珍しいんぢやないの? そんなに人間に思い入れするなんてさ。前はただの契約対象であり、邪魔になれば魔力だけ貰つて切り捨てるかのような存在ぢやなかつたの?」

「ええ。確かに、そういう時期もあつたわ。でもね、違うのよ。それは間違つた考え方。変えなければいけない考え方……」

真咲の言葉にシェイドは黙つたままだ。彼女の言葉には断固たる意志があつた。

そして、ついにしひれを切らした部下の一人が真咲に飛びかかつた。

ガウン……

無造作に銃口を向けると引き鉄を引く。超音速で射出された弾丸は影の頭の中心に突き刺さつた。

グ、ぐるヒヒッ!

奇声を発して飛びかかる影たちを真咲はいとも簡単に屠る。呼吸をするかのように簡単に、スムーズに。当たり前に。

右から飛びかかってくるようならば、半身でかわし、着地した瞬間に頭部を後ろから打ち抜く。数にものを言わせた突撃も、無尽蔵に吐き出される弾丸の前には無力。

両手に収まつた銃の弾を撃ち終える「ひひこせ、真咲とシェイド以外この部屋で動くものはいなくなつた。

「……ほんと、変わったよ、真咲はさ。……あーあ、やつぱ昔に戻れたらいいのにね」

ショイドは鎌を肩にかけると自らの斜め上に視線を向けた。何か、思い出すかのような仕草。遠くを見詰めるその目には哀愁のようなものが漂つていて。

「君が指揮官でさ、僕たちは強かつた。……だけど、そんな指揮官を疑う者もいた」

今度は真咲が黙つている番だった。黒髪の死神の独白を聞くために。

「そいつらが起こした反乱……それで君ははじめて仲間を、その手で殺めた。その中には僕も含まれたよ。あのときは、憎しみしか起らなかつた。……知つてるかい。君が反乱を鎮めるために殺した悪魔の中には反乱側じゃない悪魔もいた」

長い、長い沈黙の後、真咲は頷いた。

「……知つたわ、全員殺した後でね。弁解しようとは思わない。悪いのは私。復讐の機会はそうして殺した悪魔たちに均等に与えるわよ。今度は……ショイド、あなたの番」

同胞の血に塗れた手……その両の手にある銃を消す。そして銃ではなく刀を顕現させる。

「難なく言つんだな、あなたは……末裔の姫君」

「いぢいち演技じみたセリフはいいわ……来なさい」

二人の間にぴりぴりとした緊張感が生まれ、視線が交差する。

「今回は執行官とか、そういう立場も関係ない。僕は僕自身の決着をつけるために……本気で行くよ 黒き死神、参る」

暗く深い声で宣言すると、ショイドの足は地を蹴つた。二人の間にあつた空間を一瞬で自らの間合いで詰めると鎌を振るつ。

黒塗りの刃を刀で受け流す。防御手段を弾かれ無防備となつた相手の腹に反対側の刀で突く。

シェイドはバックステップで間合いの外に逃れた。真咲の攻撃はかすめてすらいない。

タンシ、ヒザを真咲の足の裏が打つ。軽い音ではあつたが、踏まれた畠はべこりとへこむ。対して、シェイドは軽く左足を引き、かまえる。完全に真咲の攻撃を受けるつもりだ。

接近後、左右からの斬撃を器用に鎌の刃で弾く。そのたび、火花が散つた。ギンギンと硬質な音が耳に響く。まるで鎌の重さを感じさせない動作。

「…………ッ！」

両の刀を交差させての突進。当然のじとく、シェイドは鎌の刃で防いだ。

「やつぱり遅いんじゃない？」

「これで終わりと思つて？」

下半身を捻ると、続けてその動きを上半身が追う。ぎゅん、と音でもしそうな捻り。刃も回転し、鎌を上方へ弾く。がら空きになつたシェイドの腹部へ、不安定な着地と同時に白刃をきらめかせる。絶体絶命の瞬間にも関わらず、シェイドは笑みを浮かべた。

弾かれた鎌は彼の手から離れることがなく、上へそれただけだった。だがもちろん防御するには絶対に間に合わない。そう、ただ防御するのであれば……

必殺の刃は次の瞬間にシェイドの腹部寸前で止められていた。止めているのは白刃と対をなす漆黒の刃。

「…………くだらない小細工を」

「秘儀つて言ってほしいね」

真咲の刃を防いだのは鎌から生える一いつ刃の刃だった。先ほどま

で用ひたものにて、必ずトキノムニシテハニ。

不機嫌そうな真咲の舌打ちと斬撃の再開は同じタイミングだった。一重に迫る鎌の刃に一振りの刀。片方を防御できたとしても、瞬き一つ後には違う方向からの刃が迫りくる。

攻防一体とはこのことだらう。むしろ、攻撃こそ最大の防御といつた感じか。

はさみのようにもなった鎌は真咲の衣服を裂く。

「それにコレ、使うのは一回目だよ？」

「……っ！」

なるほど……前回はこいつの仕業だったということか。

先日の屋上で戦いを思い出す。一瞬の間にかまいたちにでもあつたかのようにボロボロになつたのは、この鎌が分裂したからなのだ。

だが……それが何だというのだ？

「一回目？……同じ手が一回も通じると思つていてるの？」

小さく唸るようなシェイドの声が聞こえた。それに続くよじこじて、漆黒の刃が空気を裂く。右わき腹を狙つた攻撃。そう判断した途端、左から刃を伸ばし防御。だが弾かれるることはない。そのまま続く第一撃も防ぐ。

いくら二つ刃があろうとも、軌道が変わらなければ防ぐのは容易だ。もちろん防ぐだけではない。逆手に持ち替えていた右手の刃をたつた今防いだ一撃目の刃。その根元に突き立てる。

ぴしり……ひび割れるのがはつきりとわかる。しかしそう簡単に死神と称される者の得物が壊れるわけはない。

「はあっ……」

とどめとばかりに、剣先から魔力を注ぎ込む。

「ちいっ……」

第二の刃が光とともに四散し、シェイドは思わず顔をかばう。

その隙を見逃す真咲ではない。

詰めた距離を一旦離す。近すぎても決定打は入れることはできない、そう思ったからだ。

案の定、シェイドは刃が碎けるのと同時に防壁を張つていたようだつた。微かに彼のまわりが赤紫に発光している。

「やるね……なんで？」

額に汗が浮かんでいた。疲れからではない。冷や汗に近いものだ。彼の問いに真咲は無言。

「まあ……いいよ。次で最後だから」

距離を詰めようとしたのか、シェイドが身構えたが、それよりも早く真咲が迫つた。

突き出される刀をシェイドは最初からあつた鎌の刃で防ぐ。

「つ？」

と、防御されたにも関わらず真咲の口元が不敵に歪む。

真咲は渾身の力を込め、刀を突き出した。交差させていた刀を開放され、黒鎌が弾かれる。

「しまつ

絶対的な刀の間合い。

墮天使の刀は両腕を開いた先できらめいた。その手を返しました交差させるだけで、シェイドの腹部への斬撃を可能とするだろう。防御するには微妙なタイミング。

だが 間に合わないわけではない。

防御できるのは刃だけじゃないんだよつ！

上方に弾かれた刃とは反対側。つまり柄の部分を防御先に回転させる。これで攻撃は防げるはずだ。

「これで……え？」

シェイドの視界には宙に舞う白銀の刃が入った。

ほぼ零距離に近い場所にいる真咲の手には黒い自動拳銃。すでにトリガーにかかる指に力が込められている。

ガウン……ガウンガウン！

放たれた弾丸は死神の黒衣に吸い込まれる。

「ガツ……

倒れ込むショイド。真咲はそれを見て片手の拳銃を消した。

「終わりね、ショイド」

「ただ無感情に……無表情に……」

彼女はそう告げた。

「ま、まさか……そんなに速いとは思つてなかつたよ……」

言葉が途切れるたびに口から鮮血が吐き出される。

第三章「独りの騎士・孤独の姫」・23（前書き）

「ヨーロッパの戦い」ペコナードが……だが……

さすがは、滅魔の射手……

途切れそうな意識の中、視線は彼女の手にある拳銃へと向けられる。

これに……どれだけの悪魔が散つていったのか……どれだけの憎しみを飲み込んできたのか……わからない。だがはつきりとわかるのは、それだけの思いを受けたとしても、この墮天使は生きているということだ。五百年というときを。独りで。

「……違うわ。あなたが遅いのよ」

きつぱりとした物言い。

「相変わらず……だね。そゆとこ。やっぱ、変わつてない、よ」  
吐血しつつも、笑みを浮かべた。彼が今まで浮かべた表情の中でも最も本心に近い顔。

「……そうかもね」

「何で、かなあ……勝てると思ったの、にさ」

「……さあ、考える時間はたっぷりあるわ。そこで考えなさい」  
銃口がシェイドの額に向けられ、がちやり、と撃鉄が引かれる。

「じゃ、またね」

「……さよなら、よ」

ガウン……

銃は自らの役目を終えるとはらはらと散るようすに消えていった。

それはその銃によつて屠られた悪魔たちも同じ。

「変わらない者なんて、この世にはいないわ。それは私も例外じゃない。……あなたは変わらなかつた……だから負けたのよ。私には慕う人だけじゃない。信頼できる人も、守るべき人もいる。だから、負けない」

誰にともなく、強いて挙げれば自らに言い聞かせるかのように眞咲はつぶやいた。言葉は消え行くが自分の想いをより強いものにしてくれる。そう信じて。

「うう……」

と、眞咲の耳につめくような声が飛び込んだ。

「つー、そうだ、翼！」

掛け軸の下で横たわっている翼に真咲は駆け寄る。その慌て様はショイドと対峙したときはまったく別人のものようだ。

「……ま、真咲？……遅えよ

「うん、ごめん……大丈夫？」

「大丈夫そうに見えるか？」

質問に質問で返す翼。

「大丈夫そうか？ と問われれば……

「問題ないんじゃない？」

「あのなあ……あいつは斃したのか？」

「うん。……終わつたよ

「そうか」

翼はそう言つと、ぐつたりと田を閉じる。

「……つて、ちょっと、翼つ」

「五月蠅い。ちょっと休ませてくれ……てか、今になつて足が震えてきやがつた。つたく、立てねえつてのよ」

「……つく

ついに堪え切れなくなつたという感じで真咲が吹いた。そして堰を切つたかのようになり出す。

「あはは、ははは」

「……お前なあ……笑うなよ」

「ははは……だつて翼つておもしろい」

「おもしろいじゃねえよ……」

翼はそこで、はつとして田を開く。

「梓はどうした？」

「とりあえず警察と救急車を呼んでもらつたわ。安心して、彼女の部屋には結界を張つておいたから、下級悪魔は彼女に近づくことす

りでやなー」「

「どこか血漫ぱこやつぱ。まあ、真咲がそつぱのなら問題ないのだらうと翼は胸を撫で下ろした。

やうなると一番心配すべきは……梓の父だらう。おやぢへ一番の重傷者だからだ。

よたよたと這いつゝにして立ち上ると、翼は頭に歩み寄った。

「頭……」

倉本組の頭は静かに息をしていた。

「……よかつた」

「ええ、どうやら無事みたいね、彼も」

「ああ、やうそろ救急車とかも来てくれる」やうだらうし

「やあああああああつつー」

びくり、と真咲と翼二人の肩が動く。  
まさか……

「一人の脳裏を嫌な予感がよぎる。最悪の予感が。  
「お前……さつき大丈夫って言つたよな？」

「え、ええ。言つたわよ、確かに」

「……悲鳴だつたぞ？ それも結構切迫した声でさ、しかも梓の「  
続く言葉は必要なかつた。冷静に分析している暇などない。

二人は全力疾走で駆け出す。一階への階段を確認。一段飛ばしで  
駆け上がる。前にも似たようなことをした覚えがあるが、今は関係  
ない。

「梓ああっ！」

無意識のうちにそう叫んでいた。そうすればもっと速くなれるよ  
うに感じて。

梓の部屋の前まで来ると、ドアを勢いよく開け放つ。  
バン！

「…………ツ！」

真咲は絶句した。その部屋にいた人物に対して。

「何つ？」

梓の部屋には……いや、梓の部屋だつた場所には見知らぬ男がいた。身上まどつた黒い外套の下で、梓を抱きかかえるかのようにして。  
「……遅かつたな。天城真咲、そして折笠翼」

低い、唸るような声が男の口から放たれる。

「…………」

「真咲……真咲？」

翼の横では真咲が視線を男に向けたまま、啞然としている。意識  
は完全に前方の男に向けられているようだ。

「久しいな……我が戦友よ」

金髪の男だつた。それも自然な金髪だ。つまりは日本人ではない（むしろ悪魔たちに人種というものがあるのか謎ではあつたが）。肩にかかるほどに伸ばされた金髪に真つ赤なルビーを溶かしたかのような瞳。どちらも完全に人外の空気を放つてゐる。極めつけはその病的なまでに冷たい感じの白い肌。

「……あなたが親玉とはね。ミシェル・ハイドフック  
敵意など生易しいものではない、殺意を込めた視線。より紅く光  
る真咲の目は男 ミシェルを睨む。

「墮天使と聞いてな……あいつに頼んで接触させたが、まさかお前  
とは思わなかつた。……しかし人間と契約 いや信頼関係にある  
らしいな。よほどそいつが気に入つていて見える」

言葉の後半から視線は翼に移る。

その目に見られた瞬間、翼の心臓は凍りついた……かのようだつ  
た。真咲の目よりも数段人を引きつけるような光を放つてゐる。同  
時にモノの価値でも見るかのようなそんな光もある。

「翼……なぜ真咲に従う

「……別に従つてんじゃねえよ」

「ほう……では何だと言うのだ？ 何を根拠にそう言い切れる？」  
どきりとした。そう言われてみれば、自分は真咲にとつてどんな  
存在なのか。考えたこともなかつた。

自分は真咲の契約者である。しかし契約自体何なのか、それを翼  
はよく知らない。真咲も言おうとしない。

曖昧なまま、今までを過ごしてきたのだ。理由を聞けば引き返せ  
なくなると腰が引けていたのだろうか。  
はつきりとした言葉が返せない。

「……なるほど、事情を把握し切れていないと言つたところか？  
では、一言忠告しておこう、人間の小僧」

心を読んだかのようか言葉に翼はさらに返す言葉が見つからなか  
つた。

「事情も知らぬ者が……我々のことに口出しをするな  
有無を言わせない口調。しかし口調が強いわけではない。強いて  
あげれば、言葉が強い。

「真咲、お前もいつまでそちら側にいれば気が済むのだ？ そんなことのためにこの世界に戻つて来たわけじゃないだろ？」

ミシエルは最後に暗い笑みを浮かべると黒い外套をはためかせた。風もないのに揺れる外套。

いや

外套の動きに従うかのようにして、室内を暴風が駆け抜けた。窓際に置かれていた花瓶が倒れ、カーテンは乱れ舞う。机に置かれていた文房具がばらばらと吹き飛んだ。

「させるかッ！」

声を荒くし、両手に片刃の剣を顯現させる。そしてそのまま一挙動で投擲。

残像すら見える速さで刃はミシエルの眉間に吸い込まれた

かに見えた。

「まだ……遅いな」

真咲の攻撃はミシエルの三田円形の刃によつて阻まれた。ショーテルと呼ばれる剣だ。それがミシエルの得物。ショーテルにより防いだ斬撃を一笑し、弾き返す。金属の擦れ合う耳を突くような乾いた音がこだまする。

「散れ」

大きく湾曲した刃は真咲の首に向かつ。寸分違わず彼女の首を弾き飛ばすために。

考えるのよりも先に体が動いてた。瞬きをする間もなく真咲は体をひねる。

かわせるか……！？ そう思考したのはすでに刃が自分に達しうとしていたときだ。

刃は真咲の首、その手前の空間を裂いた。ぱつさりと真咲の長髪が舞つた。

「ふん……避けたか。だが、まあいい。今回は挨拶がてらだからな」  
そう言つると同時にミシェルから膨大な魔力が放たれた。翼の目  
にも見えるぐらい強力な魔力の放出。

「ちつ……」

真咲は咄嗟に魔法防壁を展開。耳を突くかのような音が響いた。

第二章「独りの騎士・孤独の姫」・28（前書き）

ついに第三章最終話……真咲の選ぶ道は……？

「で……あいつがお前の言つてた『化け物』ってやつか？」  
倉本家一階の縁側に腰掛け、翼は口を開いた。隣では相変わらず  
真咲がだんまりを決め込んでいる。先ほどまで腰まであつた髪は肩  
口で切りそろえられている。それがどこか寂しげだ。

「ふう……」

本来こんなことをしている時間などないのだが、彼女が黙つたま  
まなのではじつじようもない。

「あいつは……」

と、よつやく真咲の口が開かれた。

「私の言つていた『化け物』の一人よ。最初に『化け物』と表現し  
たのは誰が黒幕かよくわからなかつたから」

「つまり何人もいるつてことか？」

「ええ。ただ今この世界にいるのはミシェル・ハイドフックと呼ば  
れる者のみよ」

そうか、どこか気のない返事を返す翼。

「よりによつてあの男だなんてね……」

「戦友とか言つてたな」

「そう……この前話したでしょ？ 戦いのこと。ミシェルは最後ま  
で私の側についていてくれた……まあ、最後には裏切られたわけだ  
けど……古い、昔の笑い話よ」

彼女の顔は夕日の橙色に染まつっていた。自嘲気味な笑みを浮かべ  
ている。

「それじゃ、こんな話はおしまい」

「……やつをと追つかけようか」

翼の言葉を制すかのように真咲は縁側から勢いよく立ち上がる  
夕日を背に翼に向き直った。

薄い影が真咲の顔に落ちる。そしてゆっくりと朱色の唇が開かれ

た。

「ここからは私自身の問題だから……」

「何?」

吐き出された言葉。

それが意味することは一つ……

まるで翼を突き放すかのような言葉。

呆然とする翼を尻目に、真咲は彼から視線を反らし夕日を睨むかのようにして立つ。背中から漆黒の羽が顯れた。

「それじゃ、ね。翼」

肩越しに振り返り、どこか憂いを帯びた真紅の瞳が光っていた。

ただ一言……引き止めるための言葉が出ればいいのに。

ただ一步……引き止めるために足が進めばいいのに。

それが、できない。なぜかはわからないが。

彼女のせいなのか? それとも自分が意識のどこかでその言葉を止めているのか?

縁側から立ち上がりとした姿勢のままの翼を置き去りにして、彼女は飛び立つた。

「……ま、さき。真咲い!」

その言葉が出たのは彼女の姿が小さくなつた頃だった。

## 第三章「独りの騎士・孤独の姫」・28（後書き）

ようやく第三章まで公開することができました。次回第四章が最終章となります。真咲の決着はつくのか……それとも……

#### 第四章「紅の墮天使・紫暗の悪魔」・1（前書き）

ついに最終章開幕！真咲とミシェルの決着は……？そのとき梓は……？

薄い紫色に染まり始めた街を眼下に眺め、風に乗る。そればかりか風になる。

郊外にあつた倉本家から中心地であるビル街まで十分とかからなかつた。

微かに残る梓の気配をたどり街の上空まで来たのはいいが、肝心の建物の位置まではわからない。さすがにそう簡単に見つかるようなヘマをする相手とは思えない。

だが、幾重にも重なるかのようにして点在するビルをしらみつぶしに探す時間はない。ただしもう少し近付く必要はあるかも知れない。

「下から見えなきやいいけどね」

隠蔽効果のある防壁を展開してはいるが、それは人間の目に対する魔術であり、カメラなどの機械的なものには写ってしまうのだ。警備用やお天気カメラなどに写つてニュースにでもなつたら問題なので、一応心配しておく。

ビルの谷間を抜ける風を利用して、器用に滑空する。短くなつた黒髪が疾風になびいた。

「……？」

微かな違和感。人間より数段優れた五感が違和感の正体を探る。いや、五感以上のものも使い、魔力を感じよつとする。

（左……右？　いや、両方つてわけね）

カツと田を見開くと、左右に風と表現するには生易しそうな暴風が生まれる。

グゲツ？

両側のビル屋上に現れた怪異を容易に屠る。

「所詮、雑魚」

小さく吐き捨てる。怪異のいた屋上に着地する。胴体を両断された怪異はうめき声を上げ、消えていく。

「さて……」二は困惑？ それとも本命？

フーンスの向こう、空調機の陰、屋上への入り口。それから現れる人間とも悪魔ともつかないわからないモノ。

「時間がないのよ……」二は

#### 第四章「紅の墮天使・紫暗の悪魔」・1（後書き）

最終章はそれぞれの心境メインになると思いますが、最後までよろしくお願いします！

警察を呼んだとは言つていたが、まさか『彼ら』が来るとは思いもしなかつた。

「……白河……さんでしたつけ？」

「どこか警戒した様子で翼は問い合わせる。

「ええ。こちらはシルフィード……もう顔見知りですよね」にこやかに微笑みながら白河は改めて自己紹介をした。銀縁フレームの眼鏡をどこか神経質そうに押し上げる。かたわらにいたシルフィードは軽く会釈をする。

「それにしても……随分派手に暴れたみたいですね」

火の点いていない煙草をくわえながら、白河が部屋を見回す。シエイドによつて荒らされたままの部屋は、まるで竜巻が通り過ぎたかのような状態だ。あらゆる物が散乱してしまつている。

「俺たちが暴れたわけじゃない」

「それはわかっていますよ。それで、その契約者はどこですか？」つまり真咲はどこにいるのかということ。

「まさか我々が来るとわかつて隠した……といつわけでもないでしょうし。気配も感じられませんね。それと」

「梓の居場所もな」

白河の言葉に続いて声を発したのは意外な人物だった。

「……新明？」

翼が驚愕に目を見開く様子をどこか楽しげに笑つて新明は見ていた。いつもの学校の制服で、だがどこか違つた雰囲気で。

「なんで……お前がここに」

問いかけに返つて来たのは鋭い視線。

「それはな、翼。俺がこういう者だからだ」

そう言い懐から手の平サイズの手帳を取り出す。警察手帳のよつなものだ。

『聖滅魔専用部隊上級魔昇華中隊・極東支部』と書かれていた。

どこかで聞いた名前……

「……同僚？」

左の白河、右の新明を交互に指差す。

「そゆこと。俺は、倉本梓を護衛するためにいる存在ってわけだ。ま、実際この仕事を始めたのは、そんな昔でもないけどな」

「お前も、知つてたつてことか？ 魔魂とか、そういうことを」

新明は無言で頷いた。

「俺のことも、真咲のことも？」

再び首肯する。

「じゃあ……梓と一緒にいたのも、護衛しやすかつたからなのか？」

「半分はな」

あつさりとした物言いに翼はなぜか腹が立つた。普段の新明とは明らかに違った雰囲気と行動をしている気がする。そんな思いを止めさせたのは白河だった。

「新明君はね、君たちを守るために我々と行動をともにしてくれたんですよ。まあ、黒幕はわかりましたし、ここから先は我々に任せてもらいましょう。倉本さんの捜索も、天城真咲の逮捕も我々の管轄ですからね」

任せて？

白河の言葉に翼の眉がぴくりと動いた。

「……させねえよ、そればつかはな」

「何？」

「あいつは……いや、あいつらは……俺が連れ戻す」

翼ははつきりと言い放つた。白河は驚いたような顔をし、隣の新明はやれやれと呆れたように首を振っていた。

「これから先は一般人が入れるような問題ではないんですよ？」

「俺だって一般人つてわけじゃないんだろ？」「

確かに、翼自身悪魔に魂を狙われるような人間で、一般人の部類に入るかと言われば微妙なところだろう。

「それに、関わっちゃったもんには最後までつき合わないと気がすまないんだよ」

「はあ……」

「白河隊長、こいつこうなると言つても聞きますんよ？ 昔っから

こいつこうヤツでしたからね」

苦笑しながら、新明が白河の肩を叩いた。

「まつたく……最近の高校生はどうしても面倒事につき合った  
がるんですかね……まあ……あなたに覚悟があるなら、この件全部  
とは言いませんが、任せてもかまいませんよ」

「覚悟?」

「ええ、命を賭す覚悟がね」

芝居がかつた口調で言い、白河は目を細めた。

「は……何を今更つて感じだな。んなモン、とっくにある」

翼の言葉に白河は微苦笑を浮かべた。そして、ゆっくりと口を開く。

「それでは、捜索を分担して行いましょう。それではシルフィードを同行させます。いいですか?」

「別に、かまわないぞ」

「それでは交渉成立つてとこりですね」

差し出された白河の手を翼は握り返した。

「それで、今私たちはあまりよく事情を把握していないのですが、  
よければ話してもらえませんかね?」

白河は長話になると悟ったのか、縁側に腰かけた。煙草は相変わらず火が点いていない。

「わかった……」

翼は一息つくと、これまでのことを話した。

真咲との会つたこと。彼女の目的。シエイドのこと。そしてミシンエルのことも。

話が終わった後も四人の間には沈黙が流れた。

「……ミシール・ハイドフックですか。厄介なのが出てきましたね  
——ミリも減つていらない煙草をぽきりと折ると、懷から取り出した  
携帯用灰皿に入れる。くしゃくしゃと銀髪をかくと、白河は立ち上  
がつた。

「何者なんだ、ミシェルってのは？」

「まあ、人間でいうところの全世界指名手配犯といったところですかね。むしろそれでも生易しいかも知れませんし。ともかく、私たちの業界で知らない者はいませんよ」

つまりは有名人ということだろう。

「なるほど……目的は？」

「それはこちらで調べたんですが、魔魂というものはご存知でしょう。それを複製できる技術があるらしく、おそらくそれが目的ではないかと思います。といつてもそれはミシェルなり黒幕を捕まえるための口実にすぎませんけどね。要は捕まえられればそれでいいんですよ」

白河は苦笑してみせた。

「魔魂てのが増えるってことは、悪魔が無尽蔵に魔力補給ができるつてか？」

「その通り。察しがいいですね。まあ、魔魂所持者の近くにいるだけでも徐々に補給できるんですが、直接取り込んだ方が何にしても早いわけで」

「なら、さつさと探しに行かないとまずいな……」

翼は話を切り上げると、縁側から腰を上げた。

「どうやって真咲んとここまで行けばいいんだ？」

#### 第四章「紅の墮天使・紫暗の悪魔」・4（後書き）

この章はどうも一回分が長くなってしまいがちですが（汗）ここからラストまで一気にいきたいと思つてるので、よろしくお願ひします（笑）

まるでミニーチュアのようになった街を見下ろし、シルフィードはその長髪をなびかせるようにして中空にたたずんでいた。その横には翼の姿もある。一人の足元には薄く魔方陣が浮かび上がっていた。「先ほども説明しましたが、彼が行っているのは『魔的複製体』というものに関する理論の研究だつたんです。『魔的複製体』というのは、いわば魔のクローンというそのままの意味です。まあ、人間ですら「コピー」が可能な時代ですから、魔という力を使えばそのようなことは造作もないわけですが。ただ何を複製するのか……それにあります。そもそも魔と呼ばれるモノを増やしたところで利益を得るのはおそらく腹黒い人間か、悪魔のみでしょう。これは止めなければいけない事実です。

そこで、なぜ倉本梓は誘拐されたのか……それは『魔的複製体』を作るためなのです」

普段は無口つぽい印象を受けさせるような態度をとる彼女だが、今回ばかりはやけに饒舌であった。そんなシルフィードの言葉に翼は首を縦に振った。

「そこで魔魂をつてことか？」

「そうです。それも覚醒間もない強いものです。これが複製された場合、悪魔は容易に魔力の供給を行うことができます。そしてもし複製された魔魂が普通の人間に吸収された場合、その人間は人外の力を得ます」

ふと、彼女は自らの契約者の上司であつた男が、膨大な魔力に耐え切れず無残な死体になつた光景を思い出した。人間があの力を取り込むことは不可能に近い。ただそれを求めてしまう者がいるのも事実だ。

「そんなものが出来回つたら、質の悪い麻薬だぜ」

「ええ。それを止めなければ……」

「で……いつまでここにいるつもりだ？」

「もう少しですよ。場所がわかるはず……」

薄つすらと開かれた目で探るのは、巨大な魔力源。また微かな魔魂の痕跡をたどる。この街で最も濃い魔力の発生源に梓と真咲はいるはずなのだ。

「この街は……やけに魔力が溢れている」

シリフィードはそんな言葉とともに舌打ちをした。

膨大すぎる魔力のせいだ、対象となっている真咲一人見つけ出すことができない。

「ちょっと待て……」

「……？」

怪訝そうな表情を浮かべるシルフィードを翼は片手で制すと、目を細めた。

なんだ？ この感覚……

すん、と鼻を鳴らしてみる。においではないらしい。……しかし翼は何かを感じ取っていた。

「……深精神共鳴？」

眉を寄せ、シルフィードが翼には理解できない単語を出す。  
まさか……ただ単に魔力供給のみを目的とする悪魔との契約でそこまでの能力を？

彼女の口にした 深精神共鳴 とは簡単に言えば、契約下にて、契約者と契約対象は意思の疎通だけでなく、視覚や聴覚を共有することができる。だがそれはあくまで信頼関係におかれる二者の間でのみ可能なことで、悪魔と人間の契約でその能力が発現することはなかつた。

シルフィードと白河でさえ、意思の疎通程度しかできないというのに……

「この少年 折笠翼…… 一体何者だ？」

「……何だ？」

「どうしました？」

外見上は平常心を保つてているように見せる。無駄に動搖はしない。

「何か……見える。左目だけ」

「おそらく……これは私の推測ですが、それは天城真咲の見ている光景でしょう。あなた方は 深精神共鳴 をしていきます。要するに、彼女と感覚を無意識に共有しているんです。左目だけ天城真咲の視覚とシンクロしたのでしょうか」

翼が首を傾げた。

「つまり……真咲の場所がわかるのか？」

「あなたが望めば」

「随分、自分勝手な力なんだな……」

シルフィードの言葉に口をへの字に曲げたが、より多くの情報を得ようとしたのだろう、目を閉じる。

感じる。

真咲の感じている風を。

風が当たる……頬と足がぴりぴりとした痛みを伝える。切れているのだろうか。

感じる。

真咲のかぐにおいを。

排気ガスのにおいだらうか……それと室外機から漏れるにおいもした。

感じる。

真咲の見るものすべてを。

ビルの……屋上。足元に原型を留めないほど切り裂かれた肉片が転がっていた。

感じる。

真咲の息づかいまでも……

いつにも増してあらい。

「見えた……ここから南に一キロけりどだ」

「行きましょ」

翼に対する疑問を押さえ込み、シルフィードは純白の翼をはためかせた。

暗い……暗い空間が広がっていた。

頭が少し痛い。ただズキズキとするような痛みではなく痺れから開放されたようなもの。

とりあえず、傷がないか確かめようと手を動かすが……動かなかつた。何かに固定されているようで、がちゃがちゃと金属が擦れる音がした。

「それに……」「」「ビコよ」

目を凝らしてはみるが、目を開けているのか、閉じているのかさえわからないほど深い暗さが広がるばかりだ。

一つのことを除けば……

「目が覚めましたか？」

眼前に浮かぶようにしていた紅い眼からそう言葉が発せられた。途端に辺りが明るくなる。無機質なコンクリート打ちっぱなしの部屋だった。どこかほこりっぽいにおいがする。

自身の体は十字架のようなものに固定されていた。両手両足首が金属の輪で繋がれている。これでは身動きがとれないわけだ。

「あなた、は？」

梓は金髪の男に問うた。

黒いスーツに身を包み、肩口まで伸ばされた金色の髪……そして……あまりにも紅いその瞳……その持ち主は微笑を浮かべた。同性異性問わず惹きつけてしまいそうな魅力的な顔立ちではあるが、梓には不気味にも思えた。あまりにも完璧すぎて。

「挨拶がまだでしたね……ミシェル・ハイドフックという者です。あなたのご友人、天城真咲と同類、と言えばご理解いただけますかな？」

同類……

それが指示する意味は……

「あなたも堕天使なんですか……？」

「まさか……同類というのは悪魔という意味で、ですよ」

やはり、そうなの。梓は男の放つ雰囲気が不気味な意味がわかつた。人外ゆえに発する雰囲気なのだろう。ヒートを惹きつけるアヤカシのもの。

「それで……わざわざあたしに何の用ですか？」

憮然とした、強気とも取れる態度で応じる。

少しでも隙を見せたら駄目だと、本能的に感じ取っていたからだ。「ははは……おもしろいお嬢さんだ。そんな目で見ないでください。こちらはあなたに協力を求めようというだけなのですから」

協力？

梓は眉にしわを寄せる。

「何ですか……協力つて

ミシェルは大袈裟に肩をすくめてみせた。

「簡単なことですよ。倉本梓……あなたと盟約を結びたい」  
ぎらり、と血の色をした目が光ったように見えた。

「盟約？」

「……真咲と折笠翼の関係は『存知でしょう？』あれと似たような  
ものですよ。あなたの中に秘められている魔力を少し貰おうという  
だけです。あなた自身に不利益なことはないでしょ？」

「待ってください。それで、何をするつもりなんですか？」

その言葉を待っていたかのようにミシェルは梓の瞳をまっすぐに  
見詰めた。

「天城真咲を殺します」

十分に間を置き吐き出された言葉は、心のどこかで予想していた  
ものだつたが、梓は驚きを隠せなかつた。

「あなたも……復讐するんですか……？」

「そう言つてしまえば簡単でしようけどね……生憎、『復讐』とい  
う言葉一つで済まされるほど、私と真咲の関係は単純なものではな  
いのですよ」

ミシェルは過去を思い起こすかのように、視線を遠くへ向けた。  
哀愁すらも漂いそうなものだが、瞳の奥に秘められた憎悪のような  
ものを梓は見落とさない。

「確かに……簡単なものではないわね」

梓の視線の先 ミシェルの背後 からそんな言葉が飛ばされ  
る。

普段、梓がよく見慣れた制服に身を包み、それでいて人間とは違

つた空気を発する者がそこにはいた。ミシェルと同じ赤い瞳がいつもにも増して鋭く、相手を射るようだ。

「ようやく来たか、真咲。お前にしてはやけに時間がかかったのではないか？」

ミシェルが梓に向けていたものよりも楽しげな、それでいて深い憎しみの込められた微笑を浮かべた。普通の人間ならば背筋が凍りそうなその笑みにも、真咲は微動だにしない。むしろ彼女も笑っていた。

「万全の体勢、というわけでもないのよ。ハンデはこれぐらいで十分でしょ? それともまだ足りない?」

絶対的な余裕。

そんなのを感じさせそうな台詞を吐く。  
ただ……

「真咲……」

梓が心配そうな声を上げる。それもそのはずで、真咲の着ている制服のあちこちに切れ目が見えたからだ。鋭い刃物で切られたようなものから、引き千切られたようなものまで。薄つすらとではあるが、血が滲んでいるようだ。

「私は大丈夫だから」

「はは……笑えたものだな」

ミシェルは何を思ったか、真咲と梓の間にいたにも関わらず、そこから移動する。

「何のつもり?」

「最後になるかも知れないだろ? 最後ぐらい言葉を交わす時間があつてもいい。それで、お前が満たされるのであればな……くく。

私はな、真咲。ここまでお前が人間たちと馴れ合っているとは思わなかつた。墮天使の末裔が、ここまで墮落するとは。神にしろ、天使にしろ、悪魔にしろ、人間と馴れ合つなどということはないのだ。もし馴れ合いが続けば、最終的にはお前自身が死ぬことになる。そんな死に方など望んではない。

ゆえに、お前がそれで満たされるというのならば、完全に満たされたお前を殺すことが私の最高の喜びとなるのだ」

真咲はそう言う男を一瞥すると、梓に歩み寄つた。

「大丈夫なの、真咲?」

「それはこっちの台詞。傷は……ないみたいね。安心した」  
真咲はほつとした顔で微笑を浮かべた。優しげな笑み。  
「これから、ちょっとあいつを殺さなきゃならない。あなたを助けるために。たぶんだけど、もう少しで翼たちが助けに来てくれるから、あなたは彼らと逃げるの。いい？」  
「そんな。真咲はどうするの？」  
「私は……」

どうするのだろう。

自分は、どうするのだろう。

梓を助けることが、今の自分の目的であり、存在理由もある。ただ、それを終えたら？ どうすればいいのか。

もし自分が殺されたとすれば、それで終わりだ。しかし相手を殺したら、自分はどうすればいいのか？

梓たちと、学校生活に戻るのか？ それともまた独りで彷徨うのか？

わからない。

確かに、人間とは馴れ合えない存在なのかもね、私たちは……そんな思いが反芻する。

顔を上げれば、そこには梓のどこか悲しげな瞳がある。しつかりとこちらを見て、続く言葉を待っている。期待と不安が入り混じつたそんな瞳。

「まさ……」

「はい。そこまでにしてもらいましょうか、梓さん？」

背後からそれ以上の会話を制す声が届く。再びがらりと口調を変え、

「真咲。お前が答えられないのなら、私が答えを彼女に言つてもかまわないのだぞ？」

対して真咲は無言のまま。

「簡単だろ？ 私を殺したとしても、その手で友を抱くことができるのか？ 友と笑うことができるのか？ 友と歩むことができるのか？ 否、答えは否だ。何百何千の屍の上に立つ貴様が、そのようなこと許されるわけがない。所詮、独りだ」

じつと室内にも関わらず風が吹き、ミシェルを覆った。彼を中心に竜巻のようになった風の壁は、しばらくするとその勢いを弱め

ていく。

「血に濡れたその手で、仲間を抱くことはできないのだよ、ルシフ  
アー」

声とともに現れたのは黒の外套をまとったミシユルの姿。眼はより深い朱に染まり、爛々と輝く。額から一対のとげのような角が生えていた。最も変化したのは、その背中から生える皮膜状の羽だろう。映画やゲームで登場するデーモンのそれを連想させる。浮き上がる血管が生々しい。唇の端からはみ出すようにして見える犬歯がてらでらと唾液に濡れていた。

「だから……なんだ」

唸るようにつぶやく真咲。

梓に背を向けるのと同時に、漆黒の羽が舞う。真咲の背中から天使の白い羽をそのまま黒く染めたかのような翼が生える。それと同時に制服をまとっていた身には、紫を基調にしたマントが顯現し、はらりとひるがえった。頭の左右のこめかみからそれぞれ生えた角は彼女が人間でないと主張している。艶やかな黒髪の間から見える真紅に染まつた眼に金色の瞳が縦長に伸びた。

「真咲……」

梓が真咲のこの姿を見るのは正確には一回目なのだが、彼女が人間でないとはつきりと宣告されたかのように呆然とした。

「ごめん……梓。いくらあなたが近くにいてくれても……やっぱり私がいれないのかも知れない」

肩越しに真咲がそう言つ。ただそれも一瞬。

「

続いたのは人外の言葉。彼女の右腕を幾何学的な紋様が取り巻き、

回転拳銃を形作る。

「

どこか禍々しさを感じさせる詠唱とともに、ミシユルは梓の家で使ったショーテルではなく、大振りの刃を顯現させる。

「……来なさい」

「ミシェル・ハイドフック……残月の夜、参る」

第四章「紅の墮天使・紫暗の悪魔」・11（前書き）

第四章も折り返し地点！

「ぐ……」

シルフィードに抱えられるようにして、翼がうめくような声を上げた。

「どうしました？」

高速で飛行しながらも、そう問い合わせてくる。翼は自らの右腕を押さえ、歯を食いしばっていた。

「いや……たぶん、真咲と誰かが戦っている。それも力の強い誰か」

「……少しどばします」

翼の言葉の意味を悟り、勢いを増す。眼下を流れる街並みが加速した。

しかし……ここまで感應しているとは。

シルフィードは内心驚いていた。先ほどの「深精神共鳴」といって、彼はやけに人間離れしている。ここまで墮天使と意思疎通ができる人間などいないはずなのに。魔魂がそうさせるのか、それとも別に何か原因があるのか。

ふと疑問を感じつつも、シルフィードは翼に指示された通りのビルに降り立つ。

何の変哲もない、雑居ビルだ。屋上は小汚く、室外機の音だけが響いている。別段変わった様子はない。

だが一人はそこに残された濃厚な魔の残り香を逃さず察知していた。

おそらく先ほどまで誰かがここで魔的な存在を消滅させたのだろう。それは考へるまでもない。

「真咲……」

翼の口から零れるよつにして、その名が出る。

「折笠さん？」

「いや、なんでもない。ここにいる。間違いない、ここに」  
はつきと断言する。今の自分の言葉には絶対的な自信があった。  
そして、左田だけ、はつきと今真咲の見ているであろう景色が  
見えた。

対峙しているのは、金髪の男。ミシル・ハイドフック。

「間違いない。今、ミシルってやつと戦っている」

「……倉本梓は？」

「わからない……いや、無事らしい、けど……拘束されてるっていうのか、こうこうの？」

翼の田には十字架に張りつけになつた梓の姿が映つた。まだ無事  
だが、一瞬先にどうなるかはわからない。

「急ぎましょ」

「ああ」

翼は左田を押さえるよつにしてシルフィードに続いた。  
その田は真咲やミシルと同じような紅い色に染まつていた。

二人が一気に距離を詰める。

人間の動体視力では瞬きをする間もなくミシェルが真咲に斬りかかつたように見えるだろう。それほどの速さ。

ギイン！

音の方が遅れて聞こえた。

真咲がバックステップで間合いを広げ、銃口をミシェルに向ける。引き金が引かれ、銀色の弾丸が吐き出された。

「ぬんつ！」

ミシェルはその大剣を振るい、弾丸を叩き落す。剣の重さを微塵も感じさせないほどの動き。続く弾丸は、柄を掴んだ手首を捻り、剣の腹を盾のようにし、防ぐ。

「はあつ！」

防ぐだけではない。撃ち込まれる弾丸をもろともせず、剣ごと突進を試みた。切つ先が床を舐め、火花が散る。

「ちつ……」

銃弾を撃てるだけ撃つと、横つ飛びに回避。瞬時に左手に顕現させた銃が砲える。

「つ！」

だがミシェルはすばやく呪文を詠唱し、防壁を紡ぎ出す。壁に弾かれた弾丸がむなしく床に散らばった。

「やるようになつたわね」

「貴様こそ……鈍つていないうで、実に嬉しい」

何事もなかつたかのように体勢を立て直すミシェルに対し、真咲は内心舌を巻いた。

予想外に相手が強かつた。やはり自分が翼といえる間に少しづつではあるが、人間の魔力を吸つていたのだろう。おそらく生きたまま吸つたのではなく、殺し、その肉体自身から吸収したといったところ

ろか。そちらの方がはるかに早く魔力を補給することができる。

それに自分自身ももう魔力が限界にきていることを悟った。いくら翼という魔魂の持ち主が傍にいたとしても、得られる力は日々わずかだ。そして先ほどシェイドに對して放つた分が大きすぎた。もちろん相手はそれを知っているとしても容赦はないだろう。真咲が殺してきた同胞の怨念を背負っているのだ。負けられるはずもない。

「ふう……」

深く息をついた。

おそらくこれが最後の全力での力の解放になるだろう。しかし梓を助けるためには現状でこれ以外に方法はない。

「あまり長くはできないから、これで最後にしてあげるわ」相手に対しても、また自分に対しても。

「それは嬉しいな。私もそう思っていたところだ」

真咲の手から一挺の銃が零れ落ちる。乾いた音とともに床に落下し、それと同時に彼女の手には片刃の剣が顯れた。はりりと柄から伸びた羽が舞う。

剣は滑らかな軌道を描き、真咲の頭上、上段に構えられた。ミシエルは大剣を引きずるほど下段に構える。

すつと真咲の眼が閉じられた。

先ほどの乱戦が嘘のよつた、耳が痛くなるほど静寂。

「…………」

梓は自分の鼓動が速くなるのを感じていた。いつのこと、このままときが止まってしまえばいいのにとすら考えた。そうすれば、誰も斃れることがないのに。

なぜ、そこまでするのか。

なぜ、そこまでして復讐をしようとするのか。

なぜ、真咲でなければならなかつたのか。

様々な思いが反芻するが、おそらく一人にとつてしつかりとした答えなどないのだろう。ただ互いの満足のため。最終的には究極の自己満足のため。

所詮、その程度なのかも知れない。

真咲は相手に戦いを挑まることによつて自らの罪を償い、ミシェルは挑むことによつて散つてきた同胞を報いるため。

どちらも逃げではないのだろうか。

己が罪からの。

過去の仲間を殺す、その罪からの。

止まらなければいけないのだ。そんな時間は、誰かが誰かのために相手を殺すなどといった。それ以外に誰かが誰かのためにすることはあるのだから。

「…………だよ。駄目なんだよつ！」

思わず梓は叫んでいた。

静寂が引き裂かれ、互いの腕に力がこもる。

囁らすとも、梓の叫びを合図にし、二人は距離を詰めた。

真咲の刀が空を両断するように振り下ろされ、ミシェルの剣が空を押し切るかのように打ち上げられた。

鼓膜が破れんばかりの金属音。

明らかに質量の差があるよつても思われる一振りの刃は、互いの中間点で停止した。いや、止まらざるを得なかつた。互いの身を擦り合わせ、せめぎ合つ。

「ふ……さすがは、墮天使の末裔。衰えてもなおその力」「今更ね。そつちこそ、早く本気出したらいど?」

「言われなくとも……っ！」

そう言つミシェルのまわりを暴風が吹き荒れる。身にまとう魔力が増えているのだ。魔力は不可視のものだが、そういう現象を引き起こすことはできる。一人の距離が一旦開く。だがそれも一瞬。再び互いの間合いとなる。

魔力を増やしたせいか、ミシェルの手にあつた剣がより巨大に、分厚くなる。剣というには無骨で、鉄板に近い。

「散れ」

剣を振り上げ、振り下ろす。ただそれだけの動作。

だがその行動からくるプレッシャーが先ほどとはまつたく違う。

「ちつ」

そのせいが、回避が一瞬遅れた。

左に飛びよにして攻撃をかわそうとするが、遅い。めきつとう音とともに刀を持った手が普通とは反対の方向に曲がった。剣が厚かつたためか、切れるということはなく、右腕はだらしなく垂れた。

「ぐつ……くつ」

額をいやな汗がつたう。唇を噛むようにして痛みを堪える。ここで受けにまわるわけにはいかない。

左手の刀を消し、銃を顕現させる。

外すわけのない距離からの速射。

ガウン……ガウンウン……

「甘い」

普段ならば絶対に外さない距離にもかかわらず、弾丸はミシェルをかすることもなかつた。

驚く真咲にミシールは一息に接近する。銃を構えたままの手を掴み、足払い。本来ならば触ることさえ容易ではないであろう相手に、そこまでできた。

「やはり、墮落しきつているようだな……」真咲

腕を捕つたまま、ミシールは真咲を見下すようにする。

「は……それが何だといつのこと。あなたも、腕、落ちたんじゃないの？」

「ほやけ。そのまま無様に友とやらが死に逝く姿を見ているがいいや」

手を離すと、梓に向き直つた。振り向きざまにひるがえされたマントから無数の黒い針が打ち出され、真咲の服を床につなぎ止める。なんの変哲もない針のようだが、真咲が力を入れよつとも、体はぴくりとも動かない。

「な、にを……」

真咲の言葉にミシェルは不敵に笑うと、梓と視線を合わせる位置に立つた。

「神の御子か……そんなことをあいつは言っていたな。まさしく、その通りか。素晴らしい魔力だ……」

その白い手が梓の頬を舐めるように伝う。まるで壊れやすいものでも扱うかのようなほどゆっくりと。梓はぎゅっと目を閉じ、ミシェルと目を合わせないようにしていた。彼の目を見たら、まるで恐怖を直視してしまうようで、嫌だつたからだ。

「最後に訊く。協力はできないのだな、倉本梓？」

まさしく、最後の通知なのだろう。その言葉に梓は閉じていた目を開け、ミシェルの視線を真っ向から受ける。もう恐怖などない。

これで梓がノーと答えれば、殺すなりして、梓から魔力を奪うつもり……本気の目をミシェルはしていた。殺すことなど厭わない、無感情の瞳。

梓はその瞳と倒れたままこちらを見る真咲の瞳を見比べた。

両方とも真赤の瞳。ルビーを溶かしたかのようと言えば美しいものだが、実際は血を溜めたかのような、どこか生々しい光がそこにはあった。

だがその奥に秘められた気持ちは違う。そこが決定的な、二人の違い。

だから、彼女はゆっくりと口を開いた。

「当たり前よ。あんたに協力するぐらいなら、真咲と死んだ方がましよつ！」

梓の叫びにも似たそれが、室内にこだました。反響する声が收まると、

「そうか、実に残念だ」

芝居がかつた仕草で肩をすくめると、ミシルはその手を彼女の頬に当たた。先ほどよりも強く。

「あ……あああああああああああああ！」

梓の口から悲鳴にも似た声が漏れ、徐々に大きさを増す。目が見開かれ、口は限界に近いほどに開かれ、声を絞り出している。

「いやああああ、ああああああああ！」

「どうこうとか、梓の額にかかる栗色の髪が、額に近い部分から徐々に白くなつていいく。

対してミシェルは快感に浸るよう、表情を崩していた。

「素晴らしい……力が溢れるとはこのことを言つのだらうな。倉本梓、殺さなければならぬことが實に惜しい」

「か、勝手なこと言つてるんじゃないわよ」

真咲が倒れたままの姿勢で、ミシェルを睨みつける。

「その無様な体勢で何を吐くと思えば、そんなことか。はつ……笑わせてくれるな。それとも何か。私に指一本触れさせないつもりで来たのではあるまいな？ その程度の力で」

ぎり、と音が聞こえるのではないかといつまじ強く、真咲は奥歯を噛み締めた。

「言葉だけでは何もできない。何も伝わらない。わかっているだろう？ 所詮、口先だけで護るつなどと言つのは、ただの馬鹿だ。力が伴わなければ、それは虚言。逆に自らを傷つけることとなる」

そこでミシェルは梓の額から手を放し、真咲に向き直つた。手を退かされた梓は喘ぎ声を上げ、肩で息をしている。

「これで一度目だな。我々が……いや、私がお前から何かを奪うと

「……」

どこかねつとりとした笑みを浮かべ、真咲を見下ろす。

「わかるか、私の気持ちが？ 清々しいものだよ。お前から奪えるといつのはな。復讐とはこうでなければならない。相手の顔が苦痛で歪むのを見なければ收まらないだらうからな。これが終われば、次はお前だ」

ミシェルの笑みに背筋に悪寒が走るのがわかつた。それと同時に湧き上るのは、抑え切れようもない怒り。

「悪趣味なのは、相変わらずだつたんですね」

今にも爆発しそうな真咲の怒りを薙いだのは、突如として響いた涼しげな声だった。

「……？」

これ以上ここに来る者はいないと思っていたミシユルが訝しげな表情とともに声のした方へと視線を飛ばした。

そこには白い制服を身にまとつたシルフィードの姿があつた。横にはせえせえと荒い息づかいの翼の姿もあつた。

「お前は……聖警察の……」

「シルフィードと申します。まあ、ご存知でしょう。あなたならば」「噂は聞いていたさ。いや……一度ぐらいは会つたことがあるやも知れんな。風遣い……四大精霊の名を冠す者の一人か」

「こちらもあなたのことはよく知っていますよ。しかし……生憎ですが、あなたと長々話をしている暇はないもので。倉本梓さんを解放しなさい」

前半まではどこか柔らかい口調だったが、後半はきつぱりと冷気のようなものを感じさせる口調。

「無理だと言つたら？」

「その場合は……」

シルフィードの両手に自動拳銃が実体化される。要は断つた場合、実力行使というわけだ。むしろそれ以外に道はない」と、シルフィードは考えていた。

「くく……くくくく……ははははははー、貴様！」ときが今の私に敵うと思うてかつ！

ただ一声放つただけ。それだけなのにも関わらず、シルフィードの髪が揺らめいた。その予想以上の魔力に彼女は口の端を歪めた。

「大丈夫なのかよ……」

シルフィードの横にいた翼がつぶやく。

「大丈夫です。時間稼ぎ程度なら、私でも。その間に倉本さんと真咲を」

さりげなく目配せをすると、翼がはつきりと頷いていた。その様子に満足げな表情をすると、シルフィードは銃を構えた。

「いきます」

ふつ、と突如として彼女の姿が消える。一瞬後にはミシェルの背後にまわっている。残像すら残さない、超高速の移動。

「つー」

さすがのミシェルも出だしの速さのためか、背後に現れたシルフ  
イードの横蹴りをもろに喰らつ。

その隙に翼は梓の元へと駆け寄った。

「梓……」

彼女の額にはびっしりと汗粒が浮かび、呼吸が荒く、浅い。目の焦点も合っていないようで、翼の声に反応はするが、その姿をはつきりと捉えてはいないのだ。ほんやりと見返してくるだけ。

「つ……ばさ?」

搾り出されるようにして出た言葉。

「そうだ、俺だ。梓、大丈夫か?」

彼女の両頬を挟むようにして、自分の顔に向ける。触れた頬は熱にでも侵されているかのように熱かった。ほんやりとした瞳に自らの顔が写される。

「翼……」

先ほどよりもはつきりとした口調でやつぱり。翼はその声に一安心すると、

「大丈夫か?」

だんだんと意識が戻ってきたのか、はっとするような仕草があつた。

「…………う、うん。なんとか。あたし……は?」

「さつき//シエルとかいう金髪に魔力を吸われてたらしい。とりあえず、こつから外してやるから、じつとしてろ」

翼は懐に入れてあつた銃 新明から預かったもの を取り出すと、構える。

両手首足首にあつた枷をそれで破壊すると、梓を十字架から下ろした。

「立てるか?」

「び、微妙」

実際、梓は立つているのもやつとつうほどで、翼の肩を借りた。

「あ、ちょっと待つてろ

梓を壁際に連れて行き、翼自身は真咲に歩み寄る。

その姿を見た瞬間から……いやどこにいるかもわかつっていた。何を見ていたのかも。感じていたのかも。体のぴりぴりとした痛みと真紅の左目がそれを語っている。しかしそんな痛みなど無視をする。

「…ちも大丈夫か？」

そして出た言葉。

「ついでみたいに言わないでよ」

真咲はどこかひきつった笑みを浮かべた。対して翼は舌打ちをする。右腕が痛い。熱く焼けるような痛みが真咲にあることを翼ははつきりとわかつていた。それでいて彼女が無理をしていることにも。「何よ……」

「頼れって言つたよな、俺は？」

二人の間に訪れる一瞬の沈黙。

どこか気まずい雰囲気。真咲は半ば翼を切り捨てるようにしてここに来たわけで。翼はそんな彼女を追いかけここまで来たわけで。「そうね……」

「なら、なんでだよ。なんで……お前は一人で無茶したがるんだ。人を無理やり巻き込んでおいて、いらなくなつたらポイか？」

「いらないだなんて……」

「違わないだろ。少なくとも、俺をここに連れて来なかつたことで俺はそう思つてゐる。少しほマシになつたかと思つたら、その矢先に突つ走るなんて……」

「違うつ！」

真咲は翼の言葉を遮り、声を上げた。

「私は、そんなつもりで翼を置いて来たんじゃない。私は……」

何のために？

何のためにここに来たのか。そんなことの答えは出でている。梓を助けるためだ。彼女を護ると言つたのは自分だから。その責任がある。自分を認め、自分が認めた存在だからこそ、その責任が重く、それでいてしつかりとした意味を持っている。

決して突き放すことはできない。彼女のことは。どこか自分に似

ていて、自分より弱くて、寂しくて……。そんな彼女を放つておくことなどできないから。

ただそう思うのは真咲だけだろうか。

そうでないといつて証明が今日の前にいる翼だ。誰よりも、梓のことを想っていた。なぜだかはわからない。だが真咲と、もしくはそれ以上の感情があつたのかも知れない。

彼にとつては護るための理由など、ないのだ。理由や責任、それ以前の問題なのだ、彼にとつて。

それでいて、真咲のことまでも心配する。

### 結局

「……馬鹿みたいじゃない……」れじや「やあつとわかつたかよ」

翼は腰に手を当てて、盛大にため息をついた。そして、笑う。「これ以上言い合っても仕方ないと思つてたところだしな……いつまで寝ていいつもりだよ、真咲」

彼の言葉に自然と口の端が笑みの形になるのがわかつた。まったくだ……自分は、大切な人間が目の前で辛い目に遭つているというのに、地べたにはいづくばつたままなのか。

「立つてくれ。あいつを倒そう」

なぜかはわからぬが、彼にそう言われるのが嬉しかつた。期待され、ともに歩めることを予感させる言葉。

真咲は体のあちこちから送られてくる痛みを無視すると、力強く立ち上がつた。弱々しく萎えていた翼をはためかせると、漆黒の羽が舞つた。

第四章「紅の墮天使・紫暗の悪魔」・20（前書き）

そして終幕へと近づく……

「契約者との最後の会話は済んだのか?」「

そんな二人に冷めた声が向けられる。

金髪の男は口から真紅の血を滴らせ、笑っていた。暗い、心の奥まで暗くなるような不気味。そのものの笑み。掲げられるように上げられた右手でシルフィードの喉をしつかりと掴んでいる。彼女の口角からも血が溢れていた。

「茶番には厭き厭きしていたところだ」

ミシェルは口元の血を舌で舐め取ると、シルフィードの体を投げ飛ばす。彼女の体は床に落ち、一度三度と跳ねた。そのまま強かに体を壁に打ちつける。

「お前……」

翼の口から忌々しげに言葉が吐き出される。

「なんだ? 駐れ合つた相手がそんなに心配か?」

ミシェルの放つ言葉の一つ一つが冷たいナイフの切つ先のように翼に突き刺さるようだつた。どの言葉にも相手を射るような殺意が込められている。しかし……

「気をしつかり持つて。一種の威圧のようなものだから……あなたと私には通じない。そんなもの」

真咲がはつきりと断言する。

確かにそうだ。今の自分と真咲にそんなものは通じない。自分たちより相手が強いわけなどないのだから。絶対的に信頼し合つていい。負けることはない。

翼はそう思うと、真咲の左手を握つた。

はつとした表情で真咲が翼を見る。その目には驚きと、どこか嬉しさのようなものが宿つていた。

「ふん……最後の最後まで、お前たちは駐れ駐れしいな……目障りだ」

梓の魔魂から補給された魔力のためか、ミシェルは禍々しいほど  
の雰囲気を放っていた。それが彼の紅い目をどす黒くしていく。

第四章「紅の墮天使・紫暗の悪魔」・21（前書き）

互いを結ぶ、  
絆

「それで、私たちをどうするつもり？」  
対して同じ紅い色でも、真咲のものは澄み渡り、一点の曇りもない。迷いのない真っ直ぐな瞳。

「消えろ」

まるで死刑宣告のように向けられた手。それを軸にし、腕にまわりつくような術式が展開される。幾何学的な紋様が浮かび、それは腕を丸ごと銃口にしたかのような巨大な銃となつた。ただし、機械的なものではなく、生物的な生々しい外見。

「……っ？」

「大丈夫」

真咲はゆっくりと、安心させるような口調でつぶやき、翼の背後に立つ。すっと彼女の手が翼を包み込むように抱きしめた。

臨界まで達した魔力が弾丸としてミシェルの銃口から放たれる。が

その一端が二人に届くことすら叶わなかつた。

魔力は、放たれはした。だが一人に届く寸前に見えない壁にでも当たつたかのように霧散したのだ。決して偶然ではない。翼と真咲の起こした必然。

「ば、かな……」

「あなたにもわからないでしょうね……人間と共存するということが……私も、もう少し気づくのが遅れていたらあなたと同じになつていたかも知れない。人間は利用するものだと、ただそう考えるだけの悪魔になつていたかも知れない。

でも、今はどれも仮定の話。もう道を間違うことなんてない。私は信頼できる人間がいるんだから……」

「いけるのか、真咲？」

何を彼女がしたいのか。そんなことは聞かなくてもわかっている。

シルフィードが 深精神共鳴 と呼ぶもので、一人の思考はつながっていた。

真咲は小さく頷いた。

それを確認すると、翼は彼女の力なく垂れる右手の下に自らそれを滑り込ませ、相手の手を支えるようにして、ミシェルに向ける。大きく真咲の漆黒の羽がはためき、舞う。激しい魔力の暴風によつて普段よりも多く羽が舞うと、まるで翼自身が生え変わったように、色が漆黒から純白へと変化した。

「 白き咆哮・金色の弾丸・その力を今解放せん・顕現せよ 」

今なら真咲の紡ぐ言葉がわかつた。そしてその意味も。重なりあつた二人の腕を中心に、ミシェルのものと同じような術式が浮かび上がる。だが同じよつなだけで、内容はまったく違う。その証拠に顕現した銃は一人の手をつなぐよつにしたもので、白銀の輝きを持っている。紛うことなき意思の表れ。

「なぜ……だ。どうしてお前ばかり……」

「 さあ……それは私にもわからないわ。ただ一つ言えることは、あなたにも時間があるということ。それを知ることのできるだけの時間が、たっぷりとね」

銃口が寸分も違うことなくミシェルの額へ向けられる。真咲の狙う先が翼にわかる。

「さよなら……ミシェル・ハイドフック」

二人の思いを代弁するかのような透き通つた 色でいうならば白い咆哮がビルに木霊し、建物全体を振動させた。

そして……

壁にぽつかりと穿たれた穴を呆然と見やりながら、翼は口を開いた。

「それで……お前はどうするんだ？」

それは、いつかは訊かなければならぬと思っていたこと。ただそう考えていたのは翼だけではない。よつて、梓も心配そうな表情を浮かべ、彼の横に立つていて。一人の正面にはもちろん真咲がいる。墮天使である天城真咲が。

「私は……」

どうするのだろう。……いや、どうしたいのだろう。ミシールの言葉ではないが、人間と魔族がともに歩むことはできないのではないのか。先ほどはそう思った。だが翼が自分を求めていた。しつかりと誰かのために歩んでいける、そう思わせてくれた。

「私は……人間じゃないのよ？」

そんな思いとは裏腹に言葉は彼らから離れようとする。自分は一緒にいたい。けれどそれで一人やそれ以外の人があるかがわからない。最悪の結果になるかも知れない。昔その手で仲間を殺めたことが脳裏をよぎる。もう過ちは犯したくないのだ。冷静になつてみればみるほど、そう考えてしまう。

「いい加減、素直になつたらどうなんですか……」

翼が何やら言いたげに口を開いたが、それよりも早く第三者の言葉が滑り込んだ。シルフィードだ。傷だらけの体を壁に預け、立つていることですらつらうではある。

「今日ばかりは何を言つても見逃してあげますから」

そんな言葉に真咲は苦笑する。自分を逮捕するべき立場の者にまでそう言われるとは。

「自分で言つたんだぞ？ 信頼できる仲間がいるって。あんなに恥ずかしいセリフ」

「そうだよ、真咲。一緒にいてくれるんじやないの？ あたしは真咲といたい」

真咲は左手で額を覆つた。

もう……止めよう。ああだこうだと考へるのは。

「ありがとう……」

そう答える。それだけなのに、涙が溢れた。紅い瞳から流れ落ちた。

#### 第四章「紅の墮天使・紫暗の悪魔」・22（後書き）

ついに第四章も終わりました。後はエピローグと+だけです。近々更新しますので、エピローグもお楽しみください。

## エピローグ「白の天使・暁の翼」・1（前書き）

久々の更新です。遅れて申し訳ない……。このエピローグに入っている詩は、藤代ゆず様（館波のサイトである閻猫のリンクに彼女のサイトがあるので、興味のある方はぜひ）に書いていただいたものです。素敵な詩をありがとうございました。それでは、ようやくのエピローグです。どうぞ……

闇に溶け出す 紅の色

窓から差すヒカリは  
世界を包み込んでいく

ビルを出るとあたりはすっかり夜だった。いや、夜といつよりも明け方に近いのかもしれない。

もともとあまり人気のない場所であつたため、翼たち以外人はいない。

シルフィードは報告があるとかで、飛んで帰つて行つた。明らかに無茶をしていたが、彼女なりの気遣いなのかも知れない。

「暗いねえ……」

梓が空を見上げ、つぶやく。空に月はない。あるのは水色になりつつある空に無数の星の光だけ。

「……時間おかしくないか？」

翼は自らの腕時計を見てみると、壊れているようで、秒針が止まつていた。

「理由ならなんとなくわかるけど……やつぱりあのビル結界を張つていたみたいね。それも時間軸まで狂わせるものなんて……ちょっと貸して」

真咲が翼の腕を取ると、腕時計に手をかざした。ぽうっと光った

かと思うと秒針はときを刻み始めた。

「どういうことだ？」

「難しいわよ？」

「じゃあ、いい」

おもむちやに興味をなくした子どものよつと、元ひみつを翼はあつさりつた。時計を見直すと、時間の表示も夜明け前になつていて。もう一度、空を見上げてみれば東の空が薄つすら朱色に染まりつた。

髪をなびかし 木々を揺らし  
激しくも儂い風は  
空に 紅と蒼を混ぜていく  
一筋の白線を紡ぎだす

「明け方かよ…… つたぐ、明日…… といつか今日も学校だぞ？」

「そうね」

くすり、と真咲が笑う。それにつられて梓も微笑んだ。  
「まったく…… それよりも、真咲、お前にいつまで羽出しつくんだよ」  
彼女の背中から生えた純白の羽を指差し、一言。確かに翼をつけ、  
頭に角がある姿はあるで「スプレでもしていいのかのようだ。いくら  
人がいないとはいえ、さすがにまずいだろ」。

「ああ、忘れてたわ」

こめかみから伸びた角をなでるようにすると、角と羽が消えた。

同時に服も、翼たちの学校の制服へ変わる。

これが一番しつくりくる。

「忘れんなよ。その姿がお前なんだから」

「そうね……」

真咲は嬉しそうに笑った。

さあ 共に歩んでいい  
たとえ道が見えなくても

君がいれば  
別の道だって探せる

「お～い！」

「和貴つ！」

手を振っている新明に梓が駆け寄った。どこか微笑ましげに見守る真咲と翼。

「な～に笑つてんだよ」

「いや……梓つて可愛いなつて思つて。それに新明くんみたいな彼氏もいるし……あらあら抱き合つちゃつたわよ？」

「だったらお前も抱きついたりすればよかつたんじやないのか？」

「翼に？ 感動のキスとか？」

「は。冗談」

「…………案外、冗談じやなかつたりするかもよ」

真咲は隣にいる翼にすら聞こえないよつた声でそうつぶやいた。  
無論、翼がそれに気づくことはない。

まったく、鈍感なんだか、敏感なんだかわからなくなるのよね……

翼つて。

そう思つてみても彼は何も反応を示さない。つまり 深精神共鳴ももう効果切れしているということだろうか。

翼の瞳も両方とも黒く戻つてしまつている。

月明かりが黒を犯す

翼と共鳴していた間、ずっと相手の感情が流れ込んできていた。それは忘れられないことだらう。彼の思つていたことがすべてわかつたのだから。梓に対してのものや、真咲自身に向けられたものも。

そしてその内に秘められた……

「つたく……」

なぜだか舌打ちをすると、真咲の肩に手を乗せ正面を向かせる。  
きょとんとする真咲を尻目に翼は真っ直ぐに彼女を見詰める。

「翼？」

きょとんとする真咲を翼はいきなり抱き締めた。あまりものこと  
に一度引っ込んだ羽が羽毛を撒き散らした。

闇を押し出す 星の色  
ビルの陰から覗く風景は  
世界に散りばめられる

「ちよ、馬鹿。本当にやるの？」

腕の中で真咲が頬を紅くし、じたばたともがくが、翼はおかまい  
なしに強く抱き締めた。

「お前がやれつて言つたみたいなもんだる……」

「だからって……」

しばらくもがいていた真咲だが、翼の言葉にじっとなる。それ  
がままというか、翼の胸に頭を寄せた。

音を吸い込み 声をはこび  
悲しくも優しい雲は  
空に虹のカケラを映してく  
僕の心を誘いだす

「なんで、私なんか助けに来たの？」

訊きたくても訊けなかつたこと。おやじのタイミングを逃したらずつと訊けないままになつてしまつかもしれない。そう思い、真咲は切り出した。

「なんでつて……あ、なんでだらうな。何と言つか……放つておけなかつたというか……」お前の手を離したら、お前はずつと一人なんぢやないかつて思つたら、不安になつたんだ。だから……つて何言つてんだよ、俺」

最終的に話がまとまらなくなり、舌打ちをした。そんな翼がやけにおもしろく、真咲は含み笑いを漏らす。

さあ 共に探しにいこう  
もしも道が途絶えても

君とふたりで

肩を並べて歩く

「……笑うなよ」

「じめん」

「それより……」

翼が改まつた口調で言つた。

「お前じや、何で俺を置いて行つたんだ?」

そして、軽く真咲の体を押し離すようにして相手の顔を見詰めた。そんな目で見られたら、嘘なんてつけなくなつてしまつ……

真咲は小さくため息をつき、口を開いた。

「あなたを傷つけたくないから……って言つたら納得してくれる？」

「随分と、まともでありきたりな理由だな」

「そうかもね……でも、私はあなたには生きていて欲しいから。罪を負うのは私、あなたは生きていてもらわないといけない」

自分と翼とでは犯してきた罪の重さが違う。

それはいくつもの屍に代えられ、重ねてきた時間に代えられ……

醒めるような朝日が

僕らを照らす

あの日のうたは

まだ響いている……

「ひやつ？」

「こいつと翼が拳で真咲の額を小突いた。

「わかつてない。お前は。そんなやわな奴なのか？　俺は、お前にとつて？」

まったく、真咲はどれだけ一緒にいたとしても、自分を頼るということはないのか。ふと少し不安になる。それほど自分は頼りにならないのか？

「契約者って言ったか？　よくはわからないけど、俺じゃなきゃ駄目なんだろう？」

「うん……」

「だったら、頼れっていうのがまだ無理だとしても……手伝うぐらいいはさせてくれよ。真咲を一人にはできないんだ」

震んでは 消えていく

泣きたいときは

立ち止まつてもいいから

まだ自分の腕の中にある彼女を見ると、目を驚いたように開いていた。

一瞬だけ訪れる、二人の時間。世界。

『一瞬だけ』というのは、彼ら以外にもこの場にいるからだ。

「なうにしてんの?」

梓が横槍気味に口を出す。もちろん顔は悪戯げな笑みを浮かべて

はいるが。その隣では新明までもがにやにやと笑っている。

「いつたいこの短期間に何があつたんだか。翼も手が早いねえ」

自分たち以外の存在に気づくと 　というか思い出すと 慌て

て体を離す。

「ばつ……違う…」

「何がよ~?」

「そ、そつよ、梓。私と翼は 」

少し休んだら

また 進める気がした

君の足音を

追いかけるよ

言い繕おうとする真咲に梓が置みかける。

「関係ない~? 一人にできない~とか、傷つけたくないとか言ってたクセに」

その屈託のない笑みと瞳がやけに怖い。そう思つのは翼だけだろ

うか？

「ま、明日にはクラス中の噂だらうな」  
新明の言葉のことが実際に起きるだらうと想像し、今から気の滅入る翼と真咲だった。

ビルの向こうからゆっくりと、紫がかつた空を橙に染め上げるようにして朝日が昇りつつあった。

それはいつも通りの朝がきたといつもであり、また日常に戻るという安心でもあった。

見上げた空には  
ふたつの雲。

## ハローゲ「白の天使・暁の翼」・1（後書き）

次で最終話となります。あとがきなんかを濃い目に書こうかな、と考えていたり（え

ハルク「白の天使・暁の翼」・2(前書き)

そして……

結局のところ、魔魂というものがどんなものだったのか。契約といつものがなんなのか。それらのはつきりとした理由はわからなかつた。

どこか不完全燃焼的なものを感じながらも、翼はいずれわかるだろうと考えている。

それと、真咲が追われていた件だが、白河の上司が爆死するという事件があり、指示がなくなつたと新明が言つていた。

つまり晴れて真咲は『学生』として生活できるということだ。

R R R R R R R

「ちつ

激しく鳴り響く田覚まし時計を叩いて止め、重い瞼をゆっくりと開けた。

ミシェルと真咲が戦つてからすでに一週間が過ぎていた。真咲も学校に慣れたようで、最近は梓や他の女友達と登校しているようだつた。その様子は彼女が堕天使であることを、自分からすら忘れさせるほど。

「ねむ……」

大きく欠伸を一つし、起き上がる。

真咲が来る前と何ら変わることのない生活。完全な日常。

怠惰で、どこか惰性で進んでいるかのような日常だが、真咲に巻き込まれてから日常でないことが起き過ぎるというのもよくないと思つた。何せ、あれから三日間は体の節々が痛かつたし、まだまた腰が痛む。

そうそう、それと梓の家だが、もう修理が終わつたらしい。梓の父親も傷が癒えたらしく、今度見舞いがてら遊びに行こうと計画していたりする。

結局、変わったものなど真咲が転校生として同じクラスにいるだけで、何も変わっていないのかも知れない。

いや、それほど急激に変わっていないだけのかも知れない。自分では気づかないほど小さな、本当に小さな変化はあったのだろう。その証拠に……

「翼？ 準備できた？」

ドアの外から真咲の声がした。これが唯一の変化だらうか？

WILD CAT (了)

## ハローゲ「白の天使・暁の翼」・2（後書き）

約半年にわたつて連載した「WILD CAT」もついに終幕です。  
まあ、第二弾や短編の構想もありますが（ぼそ）それでは、  
また次の作品でお会いしましょう、最後までおつきあいありがとうございました  
（じざいました）――

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7749a/>

---

WILD CAT

2010年10月8日13時52分発行